
東方必殺仕事人

月見草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方必殺仕事人

【Nコード】

N3715R

【作者名】

月見草

【あらすじ】

『金は天下の回りもの』ところがどっこい近頃は、天下が金の回し者…。

金さえありゃとは申しませんが、情けがありゃとも申しません…。綺麗事ばかりじゃあとのつまりの堂々巡り…。

どうやらどの世に生まれても、こいつだけは許せねえってな輩がおりますもので…

時は江戸時代。スキマで外の世界に來た紫率いる仕事人が、天に変わって晴らせぬ恨みを晴らす！

私ではなければ、あなたの晴らせぬ恨み晴らします！よければお書き下さい。

第一話・因果応報

「へっへっへ…これでまた一つ、儲けが増える…」

「無駄口たたいてないで、とつとやっちまいな。誰かが見てたらどうする？」

「へい、片付けちまいます。それはもう…」

月も見えない新月の夜、手拭いで口を隠した男二人が口々につぶやく。

草木も眠る丑三つ時、辺りには誰もいない…

数十分後…

カーン、カーン、カーン…

「火事だあ！」

ゴオオオオオ！

「おとつっあん！おっかさん！」

「だめだ！これ以上近づくんじゃねえ！」

「いやあああ！」

次の日の朝…

「暇ね」

幻想郷の最古参、八雲紫は退屈をもて余して幻想郷を抜け、江戸に来ていた。

ここは江戸の郊外にあるさびれた神社の一角である。小高い山の上に出来ているため、参拝する人はまずいない。

紫はここをいたく気に入っていた。郊外ではあるが江戸。江戸名物の三社祭も、普段の商店の活気もここからよく見える。

春の江戸はとても温かく、時折吹く風が何とも心地いい。

「…？」

ふと感じた気配。とつさに身を隠す。現れたのはまだ十にも満たなそうな少女だった。手には50文程を握っている。子供には大金だ。

「…」

思い詰めた表情で、少女は参道を歩く。そして、持っていた銭を全て投げ入れた！

ジャリンジャリン！

パンパン！

2回、大きく手を叩き、少女は拝みだす。

「お願いします。近頃、江戸に火事が増えています。私の家は今、おじいちゃんが寝たきりになっています。どうか…火事が起こらないようにして下さい」

その少女を紫はただ黙って見ていた。つぎはぎだらけの着物を着て

いる。

おそらく職人が商人の子だろう。それにしても随分な大金だ。今まで貯めた金だろう…

ジャリッ…

「おい、金が有り余ってんなら、その金俺たちによこしてくれよ」そこに現れた3人の少年が、棒を片手に現れた！

「何よ！あんた達にやる金なんてないよ！」

「うるせえ！」

バシッ！

「きゃ！」

ジャラ、ジャラ…

「へへ、結構な金だな。どこから集めてきた？」

「やめて、それはあたいが入れたお賽銭だから！」

「いいじゃねえか、所詮神なんていやしねえ。賽銭に使うも、俺たちに渡すも一緒じゃねえか…」

そう言い、仲間達と笑いあう悪ガキ達。

『金を置いて、とっとと出ていきな…』

不意に響く女の声。だが、どこから話しているのかわからない…

「だっ、誰だ！」

『この神だ。その子が願いを叶えるために入れた銭、置いてって
もらおうか』

「姿を見せやがれ！」

「ひゃあ！」

突然、悪ガキの一人が騒ぎ出す。

「な、なにビビってやがんだ！しっかりしろ！」

「だ、だって、おいらの足、足が…」

子供の足は地面から突き出た手に掴まれている！

「う、うひゃあああ！」

おぼつかない足で、悪ガキ達はクモの子散らしたように逃げていく。
少女は驚き、その場にへたりこんでいた…

「大丈夫かい？」

紫が傘を回しつつ近寄る。人間に見られてもいいよう、髪を黒くして
後ろで結っている。服も深紫の生地に藤をあしらった着物と黒の
帯に替え、傘は朱色の番傘に替えていた。

「神様が、神様が現れたの！」

「神様？」

「いたの！神様を悪ガキ達が怒らせたから、土から手を出してきたの！」

興奮気味に話す少女をたしなめ、二人は石段に座る。いつもは人間には近寄らないが、紫はなんとなく興味がわいた。

「お嬢ちゃん、名前は？」

「お絹。お姉ちゃんは？」

「紫よ。よろしくね。ところで、ここに一体何しに来たんだい？」

「…最近、火事が多いでしょう？だから火事が起こらないようお参りに来たの。寝たきりのおじいちゃんもいるし、家が燃えちゃうと嫌だから…」

「でもなんでこんなさびれたところに？」

「だって、人がいっぱい来る神社じゃ、神様がいっぱい願い事聞くから私の願い聞いてくれないと思って」

そう言い、お絹は微笑んだ。純真な心からくる笑顔がまぶしい…。なるほど、それでこんな大金を…。その健気さに紫は心引かれた。

「そっか。なら大丈夫。きっと叶えてくれるさ」

紫は優しくお絹をなで、微笑み返す…。それから二人は話し始めた…。といっても、紫が聞いてお絹が答える方が多かったが、二人は楽しい時を過ごした…

「本当に大丈夫かなあ？」

「大丈夫さ。じゃあ紫お姉ちゃんと指切りしよう」

「うん！」

やがて日は暮れ、お絹は帰っていった。何度も手を振り、町の中に消えていった…

その日の夜、丑三つ時

「本当にやるんですかい？この長屋で火事が起こりゃ、相当の人が死にますぜ」

「だから何だ？旦那からの指示だ。最近商店ばかり燃えてるから、疑わしく思う奴が増えている。だからその目をごまかせとよ。いいからやりな。何、ばれやしねえ…」

ガバツ！

朝、紫はいきなり目が覚めた。何か、嫌な予感がする…。
気になって江戸にいくと、予感が的中した！

「…何てこと」

神社から、その焼け跡がはつきりと見えた。お絹が危ない！瞬時に紫は焼け跡に向かう！

嫌な予感が当たった…。焼け跡から運び出される遺体の中に、確かにお絹はいた。昨日、指切りをしたあの手、あの着物、間違いない！

人目を避け、スキマの中で紫はただ泣いた…。何が大丈夫だ。結局、期待させるだけさせといて裏切ってるじゃないか。バカ野郎…。

ふらついた足で、紫は無意識に飲み屋に入った。奥の席で熱燗をちびり、ちびりと飲んでいく。何も考えなくなかった。ただ今だけは酔いたい。そう思った…。

「…にしても、ずいぶんな稼ぎですねえ、銀二の兄貴！」

ふと、後ろで聞こえる笑い声。紫はただ聞き流していた…。

「おう、全くあのお方は大した人だ。ま、飲めよ定吉！」

「へへ、いただきやす。しかしあの材木商、相当な悪ですねえ…」

「ばか、声がでかいぞ！」

「つと、すいやせん…」

その言葉に耳を疑う。材木商が悪人？まさか今までの火事は全部…。一気に酔いが覚める。ここで泣いてもしょうがない…。

紫はそのまま、銀二と定吉を尾行した。二人とも着物の前を少しはだけている。見た目からしてチンピラであることに間違いはなかった。

数分して、二人は材木商「松屋」についた…。紫はスキマで天井裏

に入り込む。

「今回から少し放火を休む」

「ええっ、どういうことですか？近松の旦那！」

「ついに奉行所も本腰をいれてきた。私の所にも探りを入れている…。給金は前渡ししておく。今はとりあえずほとぼりを冷ませ…」

「…なるほど、話は全てつながった…」

外の世界の神社の本堂。ここに、紫の仲間が集められた…

「それで、恨みを晴らしてやりたいの。でもあいつら、他にも恨みを買っているらしく、結構用心深くて私一人ではバレる恐れがあるわ。それで幽々子、萃香、あなた達の力を借りたいの。依頼料はすでに、お絹からもらったわ」

ジャラララ！

「いいよ。引き受ける。聞いただけでも胸くその悪くなる話だ！このままじゃあ酒がまずくなる！」

「私も。一足先に彼岸を渡らせてやるわ」

「…ありがとう。的は、浪人の銀一、定吉。材木商松屋の主人、近松庄衛門。よござんすね」

金をとり、一人、また一人と闇に消えていく…
フツ…

紫が口ウソクを消し、部屋は闇に包まれた…。

「ふーっ、また酒でも飲みに行きますか？」

「今はやめとけ。大体お前は飲むと口が軽い…」

「銀二さんと、定吉さんですね？」

「誰だい、あんた？」

「近松の旦那に、労をねぎらうよう言われてやって参りました。幽々子と申します。どうぞこちらに…」

幽々子もまた、衣服が変わっている。黒髪で、藍色の生地には白で桜模様が描かれた着物を着ている。

「へえ、旦那も気が利くな」

「定吉さん、少々こちらでお待ち下さい」

「おう、わかったよ。兄貴、楽しんできて下さいよ」

定吉は何の疑いもなく、用意されたつまみと酒に手を伸ばす。

「つとに、この生活はやめられねえ…。一仕事で3両だからな。しかし本当に酒がうめえ…」

そっくり、酒を飲む定吉の後ろで、徐々に「それ」は型どられていく…。

塵あくたが集まりだし、鬼の形を作り出す！

「あんたに酒を飲む資格はないよ」

ガッ！

瞬時に手が定吉の首根っこをつかむ！

ゴキン！

一瞬で首の骨をへし折り、鈍い音が響き渡る……

「ぐえっ！！」

ドサッ！

首がねじ曲がったまま、畳に突っ伏した……

「…酒の旨さは何よりも、飲むときの雰囲気にある。汚い銭で買った酒など、飲むまでもなくくそ不味い！」

「さあ、こちらです。銀二さん」

「おう、それにしても美人だなあ。雪のように白い肌だ…」

パラッ！

「いやっ、恥ずかしいです…」

そっつい、幽々子は扇子を広げ顔を隠す…。

「おいおい、見せておくれよ。その白魚のような肌をよ…」

ヒュン！

「がはっ！」

扇子に仕込んだカミソリが、銀二の喉を切り裂く！

「あなたが見ていたのは、地獄の死神だったのよ…」

チャリン、チャリン…

「へへへ、これで仕事がいっぱいだ…」

「見下げ果てたわ。この下衆め」

「誰だ！」不意に聞こえた声に叫び返す！障子の向こうに誰かいる。傘をさした女が一人、自分の前にいる…。ゆっくりと女は、傘を閉じていく…。

「このお！」

近松は床にあった刀で、影の映る障子突き刺した！

「え？」

突き刺した刹那、影は消えた…。理解を超えた出来事に呆然となる。

次の瞬間！

ドシュツッ！

「ぐあっつ！」

誰もいないはずの背後から、その手は伸びていた！突如開いた空間から飛び出した傘、その先端はアイスピックのようにとがっている…。傘は近松の心臓をとらえていた。

「…地獄で業火に焼かれるがいいわ！」

グシュツッ！

「あ、あっ」

心臓をさらにえぐり、傘が紅に染まる……

ドサッ……

口から血を吐き、うつぶせに突っ伏したのを確認すると、スキマでその場を後にした……

第二話・髀肉之嘆（前書き）

仕事人紹介

八雲紫

この話の主人公。武器は傘。先端がアイスピックのようになっている

西行寺幽々子

武器は扇子と…色仕掛け？

伊吹萃香

武器は素手。一瞬で相手の首をへし折る。

第二話・髀肉之嘆

「何だと…もうやらねえだと？」

「ああ、これ以上自分を偽りたくはない……殺すなら殺せ！」

「じゃあねえな…じゃあやる気を起こしてやるよ……」

「な、何をする！やめろおお……」

「こっちの方が男前よ！」

「いやいや紫、こっちだってば！この目、たまんないわ」

「何を二人で騒いでいるんですか？」

幻想郷の八雲亭で、紫と幽々子が騒いでいるのを見て藍がやってきた。

相変わらず藍は忙しそうである。昼食の支度に追われているようだ。

「これよこれ！巷で有名な浮世絵師、東風寺春楽とうふうしはるがくの絵よ！この段七郎の見栄の切り方、格好いいわ」

「あら紫、この双五郎の方が上よ」

「はあ、そうですか…」

正直、藍には下らない話だ。というより迷惑である。紫と幽々子の周りには多くの役者絵が散らばっている。

どうやら『誰が一番格好いい役者か』という、興味の無い者にはどうでもいい話で盛り上がっているようだ。この片付けは…言わずもがな、藍である。

「そういえば紫、浮世絵で思い出したけど、今日って…」

「……あーっ！春楽の新作が発売される日だわ！行きましよう幽々子！」

「紫様！お昼は…」

「とっというて！行ってくる！」

「妖夢によろしく」

そう言うで一瞬で見た目を人間に変える二人。妖力なのだろうか、かなりの早業である。

見事なのだが…着替える際にいちいちポーズをつける二人が妙に笑える…。

「はあ、困った方々ですね……」

「全くだ。段七郎だの双五郎だの…。鬼に比べりゃまだまだ子供だよ」

「あなたも困った方の一人ですよ！なんで萃香さんが家で酒のんでいるんですか！？」

「おーい！こっちにもくれえ！」

「私にもちようだい！」

春楽の絵を売っている版元、辻屋は人でごった返していた。老若男女問わず多くの人がいる。

「どうしよう…これじゃ買えないわ…」

「任せておきなさいって！幽々子、周りを見張って。この紫にかかれば……」

そう言うと二人は路地裏に隠れ、紫はスキマに手を突っ込む！
ごそごそと手をまさぐり、お目当ての新作を取り出した！

「紫！あんだ…」

「大丈夫！お金はちゃんと置いた。はい、これ幽々子の分！さ、帰りましょうかね」

「いやゝ、さすが春楽！段七郎がいい味出してるわゝ」

「私は双五郎の方が良かったわ……。でも確かに格好いいわね」

手に入れたのは段七郎の絵だった。紫は大満足していたが、幽々子は少しむくれていた。双五郎でなかったのが悔しいらしい…。

「いいじゃないの！段七郎の方がいいわよ！」

「双五郎がいいわよ！」

「…紫様、お客様ですよ。全く…」

呆れ顔で、藍が一人の女性を連れてきた。それは…。

「ちょうどいい！ねえ、どっちがいいと思う！？阿求！」

「え、えーと…」

紫と幽々子がにらみ合う中、やってきた稗田阿求は言葉に詰まっていた…。

紫が突き付けた新作の浮世絵を眺めると、あごに手を当て、阿求は考えこむ…。

「段七郎よね？」

「双五郎よ！」

「……違う」

阿求はぼそりとつぶやく。首をひねり、さらに考えこんでいる…。

「ほら、やつぱり段七郎よ！」

「違いますよ紫さん！私が言いたいのは、その絵が違っていることです！」

「え！？」

阿求の言葉に、二人は顔を見合わせる…。

「この絵、春楽ですよ？でも、前にみた絵と筆遣いが違う……」

そういわれ、あわてて紫は持っている絵と並べてみる。

「これは3年ほど前の作品ですよ。ほら、筆遣いや色、陰影の付け方が微妙に違う……」

「…まさか、偽物！？でも、ちゃんと版元の辻屋から買ったわよ？」

「何かあったようですね……」

「私、探ってみるわ！」

スキマを開け、紫は江戸にすっ飛んで行った！

江戸の辻屋の地下に紫は忍び込んだ…。すでに亥の刻【午後十時ごろ】である。

うつそうとした地下に、ろうそくの光が一つ揺らめく…。

地下の奥には牢屋がうつすらと見える…。

ザッ…ザッ…。

「足音!？」

紫はすぐに身を隠した!

「おい、時頼は無事か？」

「へい、旦那さま…。少々無理やりになりましたが、描かせました」

「……頼む!もつとくれ!阿片を…阿片をくれえ!!忠衛門!吾平!」

地下牢の鉄格子を揺らし、時頼は涙ながらに訴える!

地下牢の中は絵筆や和紙、そして阿片を吸うためのキセルが置いてある……。

時頼はすでに阿片の中毒者になっていた。鉄格子を握る手は、小刻みに震えている…。

「ああ、くれてやるよ。今回の褒美だ。さあ、夢を見な…」

「あああ!」

時頼はキセルに阿片を詰め、一気に吸いだした!

「お、おい!そんないっぺんに…」

「がはっ!」

そのまま、時頼は倒れた…。息は絶え絶えになり、震えはさらに激しさを増す!

「…ちつ、替え時か」

「いいんですか旦那？元狩野派のいい絵師なのに…」

「…かまやしないさ。またいい絵師をさらって描かせりゃいい。大体、当の春楽が死ななけりや、こんなことしなくてすんだのに…。おい鬼正。とつとと始末しちまいな。もう用済みだ…」

「御意」

力チャ！

「あああ、ああ！」

ドシュツツ！！

「吾平、鬼正。辻斬りに見せかけて、川にでも放り込んでおけ。何、ばれやしない。奉行所ならすでに押さえている…」

「はっ」

「何てこと……。こうやって薬づけにして…」

溢れ出す怒りを拳に込め、紫はただ震えていた…。

「あんた！あんたあああ！」

「お父ちゃん！お父ちゃん！」

早朝、川の中で絵師、時頼の遺体が見つかった…。
ずぶ濡れになり、変わり果てた姿が何とも痛ましい…。
時頼の遺体にすぎりつき、妻と息子はただ泣き続けた…。

「可哀想なことだ…。一昨年に消えた旦那が、こんな形で帰ってくるとは……」

「辻斬りだそうだ。物騒なこつたな」

「んな馬鹿な！雲隠れして死んで帰ってきたんだぜ！？それにあの変わり果てた顔！どう考えても何か裏があるだろ！」

「奉行所は辻斬りと言っている。変わり果てた顔は、消えた後阿片にはまったせいだとさ」

「けっ！どうせ上から圧力をかけられたんだろ！時頼の旦那が阿片に手を出すハズがねえ！ちくしょう！」

野次馬達が口々に話す。これがいづらのやり口か……。
唇を噛みしめ、紫は一人その場を後にした。

「父ちゃん、何で……」

町外れの墓場で、少年が一人泣いていた……。時頼の息子、時貞である。

彼もまた、時頼の帰宅を心待ちにしていた。七つの時に消え、それっきりの再開だった……。

『恨みを晴らして欲しいかい…？』

ビクン！

突然聞こえる声に、時貞は辺りを見渡す。だが、自分以外には誰もいない…

『江戸のはずれの神社に行ってみな…。そここのほくらに金を入れて恨みを話せば、神様が叶えてくれるってよ……』

その日の夕方、時貞は一人でやってきた。懐には大事そうに金を抱えている。

ほくらに金を入れ、手を合わせると、静かに語りだした…。

「おいらの父ちゃんが誰かに殺されました……。お奉行様は阿片にはまり、辻斬りされたと言ってます。

でも、父ちゃんは阿片に手を出したりしません！誰かが父ちゃんに何かしたんです！

……父ちゃんの香典を少し持ってきました。この金で、父ちゃんの恨みを晴らして下さい！」

そっつい、一分銀を三つ取り出す…。

『その恨み、引き受けた…』

「神様？神様かい！？」

『とつとと帰りな。振り向くんじゃあないよ……』

「なるほど、これは彼の香典……。わかったわ。引き受ける」

「地下牢に閉じ込めて描かせ、断れば拷問に薬づけ……。外道にも程があるわ」

バシイン！

「私もやるよ。鬼の力見せてやる！」

手に拳を打ちつけ、萃香が叫ぶ……。

「……殺しの的は、辻屋主人、辻屋忠衛門。番頭の吾平。用心棒、鬼正……」

金を取り、闇へと消えていく……。

フッ……

ろうそくを消し、神社は闇に包まれていった……。

辻屋にて……

「ふああ、しつかし、ここの旦那はすげえ……。ここにいりゃあ、この鬼正も安泰だ……」

「鬼？あんたは名ばかりだ。いや、名を語る価値もない……」

「何だ！？」

突然現れた影に、鬼正は凍りつく……。目の前の障子には、いつの間にか二本角の影が写っていた……。急いで刀を抜き、障子を突き刺す！

影は一瞬で消え、障子のみがそこにはある……。

「……いない！？確かにいたのに……。何だ今の？」

「鬼さ」

ガシッ！

その手は力強く、首をつかむ！

ゴキン！！

「がつ……」

鈍い音が響き、首が異様にねじ曲がる……

ドサッ……

口から少し泡を吹いたまま、その場に突っ伏した……。

「ふああ、しっかし役者絵はよう売れる…」

「ねえ、番頭さん。絵を売っておくれよ」

「誰だい？新作なら売り切れたよ」

「夜分遅くに申し訳ありません…。でも、その分お礼はしますよ？」
「そっ、幽々子は着物を少しはだけ、吾平の腕に手を絡める……」。

「そ、そういうことなら…」

「ねえ番頭さん。春楽ってどういう人ですか？」
「ゆつくりと扇子を広げ、幽々子がたずねる…」。

「さあ…。私も見たことがございませんから……」
「幽々子の手をつかみ、吾平が顔を寄せていく。すでに顔が火照っている……」。

「その春楽に、会わせてあげましょうか？」

「え？どういう…」

「ヒュン！」

「ぐあっ！」

「一瞬の事だった…。剃刀を仕込んだ扇子が闇夜を舞い、首を鮮やかに切り裂いた！」

「ドサッ…」

「血が広がっている畳に顔ごと突っ伏した…」。

「こういうことよ。いや間違いいね。あなた地獄行きだから…」

パチン…

血まみれの扇子をたたむと、静かにその場を後にした…。

「ふふ、役者様々。絵師様々だ。いい稼ぎになる…。ん？」
ふと感じる、一筋の風。ろうそくが揺れる……。

パサッ！

「え？」

障子の隙間から、絵が投げ込まれた。広げるとそれは地獄絵図だった…。

「これは…」

ザシュッ！

障子を突き破り、銀色に輝く傘が胸を貫く！

「あうっ！」

「……これから必要でしょう？迷わないように持っていきなさい…」

グシュッ！

傘にはなおも力が込められ、鮮血で傘が紅く染まりつつ心臓をえぐる！！

「あ、ああ……」

ドサッ
…

仕留めたのを確認すると、スキマでその場を後にした……

第二話・髀肉之嘆（後書き）

髀肉之嘆【ひにくのたん】　いかがだったでしょうか？

題名の意味は腕前を示し、功名をたてる機会が無いことを意味します。

普段見ない熟語ですが、話に合っていると思ってこれにしました。

2作目ですが…反省点もいろいろ出てきました。

幽々子が毎回色仕掛けをしています。『実際の仕事人と違って全員女なんだから、色仕掛けを使うキャラがいてもいいんじゃないか？』というアイデアのもと、このようになりました。

幽々子ファンの方、大変申し訳ありません。18禁になりそうな事はしませんでしたのでご了承ください。

また、江戸時代のキャラは私の命名、もしくは実際の人物のモジリです。実際にいらっしゃる事は…ないと思います。

東風時春楽↓東洲斎写楽

段七郎↓市川團十郎

双五郎↓市川染五郎

辻屋↓薦谷つたや

書店のTSUTAYAは、創業者が現代の蔦谷になるという思いを込めて命名したそうです。

読了ありがとうございました！

第三話・物価操作

「久々の江戸ね」

神社の石段に座り、紫は江戸の街を見渡している。

ここは江戸の外れのさびれた神社である。人がろくにこないため、ここからよく江戸に来ていた。

「じゃあ、私はここで！」

そういい、一緒にやってきた萃香は江戸の街に消えていく。

目的は当然、酒である。もちろん、持っている瓢箪からも酒は出るが、たまには味を変えたいらしい。

萃香もまた、人が見ても構わないように変装している。

黒髪に真紅の生地、白の梅が描かれた着物を着ている。帯は青く、少し着崩しているため結構派手である。

豪快な気骨がそうさせるのだろう、他の人に比べて目立つが、萃香は大して気にもせず街に向かった。

「さ、幽々子。おすすめの飯屋に案内して！」

紫たちは飯屋に向かう。いきつけの飯屋の話聞いた紫が、食べたくなったらしい。

「美味しいわよー！藍にも引けを取らないんじゃない？」

「楽しみね」

「んゝ美味しい!」

二人がやってきたのはうなぎ屋である。脂の乗ったうなぎと、秘伝のたれが箸を進めていく…。

「この味は藍でも難しいわねゝ」

「でしょう?うなぎ重おかわりゝ」

「はい!」

「幽々子、もう一杯食べるの?」

「ええ、幽霊は太らないから…」
小声で紫に耳打ちする。

「お待ちどうさま!」

「わゝ、いい匂い!」

「ありがとうございます。最近はこのうなぎ重食べてくれる人がいないから、お客さんみたいな人はありがたいですよ」

「へえゝ」

「何せ、米が値上がりしたでしょう？その影響で財布の紐が皆固くなりまして…」

「勘定、置いとくよ」

「ありがとうございます！」

二人は店を後にする。言われてみると、確かに前にきた時より商店に活気がない。

その中で珍しく人だかりができている。

ドン…！

「おい！あんた騙してるだろ…！」

「あの声は…」

声の主はやはり…

「何でこの前より十五文も高いんだよ！」

萃香である…。

どうも値上がりが納得いかなかったらしい。

酒屋の床に片足を置き、店主を睨み付けるその姿は、見た目は背の低い女でも男顔負けである。

店主は腰が抜けている。番頭と女中は店からすでに逃げ出した…。

「止めなさい萃香！」

バシッ！

「痛っ！」

酒屋で主人に啖呵を切る萃香を、傘で叩いて紫がたしなめる。

「酒屋の主人が騙している訳じゃないの！米が値上がりしているのよ！」

「え！？じゃあ嘘じゃ無かったのか…。いやすまない…」

そついい、ばつが悪そうに店の片付けを始める。

「だから言っただでしょう…」

店主が疲れた顔をして答える。いくら言っても聞いてくれなかったらしい。

「何だい…。喧嘩しないのかよ…」

人だかりは徐々に消えていく…。

「しかし、あんた大した啖呵の切り方だな！気に入った！飲もうぜ！」

「おう！ありや大したもんだぜ姐さん！ま、向こうの飲み屋で一杯

「どうです？」

酒の値上がりにも不満をもつ男たちに気に入られ、萃香は飲み屋に連れていかれる。

「お、酒なら喜んで飲むよ！」

「はあ…。幽々子、萃香が飲み過ぎないように見ててくれない？」

「いいけど、紫は？」

「さすがに値上がりしすぎと思うわ。原因を調べてみる」
小声で二人は話し合う。

「ねえ、旦那。何でこんなに値上がりしているの？」

「ああ…実は…。冷夏による不作もあるんですが…」

酒屋の主人はよほどさっきのが効いたのだろう。いつもより口が緩い…。

「大きな声じゃあ言えませんが、米問屋の八重屋さんが米の買い占めをしているという噂があります…」

「そうですか…。ありがとうございました」

（仕事になりそうね…）

その夜、八重屋にて

「旦那、上手く行きましたね」
酒をつぎ、番頭の米助が話す。

「ああ、不作を予想して買い占めたのが良かった。仕入れ値の五割増しで売れる…。ありがたいことだ…」

「ですが、九州の方では豊作だったそうです。その米が流れてきたら…」

「問題ない……。すでに手は打つてある。他の米問屋は廻船問屋の佐上屋により船で江戸に運び、八重屋を破滅させる気だ」

「ならばどうするおつもりで？」

「簡単なこと。米問屋に着く前に始末すればいい。米助。すぐに海へ向かえ。用心棒の嘉助が始末している頃だ。持ってきた米を家の蔵に入れてしまえ」

「…わかりました」

（……佐上屋が危ない！）

次の日の早朝

「お前さん！何で……。ああ……」

海岸で、佐上屋の船頭たちが斬られて死んでいた……。
血まみれになった船がその壮絶さを思わせる……。

「……これは、米で儲けを稼ぐために、八重屋が行ったものですよ！」

船の近くで町奉行が言い合う！

「黙りなさい！大した証拠もない！」

「では、消えた米は誰が手にしたと？今すぐ八重屋を調べてみるべきです！」

「ええい！金銭については勘定奉行の役目！町奉行が口出し無用！」

「しかし……」

「……口を出し過ぎると、ろくなことはありませんよ？」

（圧力をかけたわね……。ということは恐らく上の老中に……）

料亭、枳屋にて

「はは、まずは一杯……」

「うむ。しかし、大丈夫か与左衛門？世間はお主を疑っておるぞ？」

「抜かりはありません、菅野様。土蔵には秘密の地下室があり、明日には全部運び終えます。明日、町奉行に調べさせれば……」

「なるほど……。考えたな……」

「ありがとうございます……」

江戸の外れ、さびれた神社にて……

「……佐上屋の船頭の一人、あたしの旦那である源太は昨日、何者かに殺されました……」。

犯人はあの八重屋に間違いないのです！お願いします！

この恨み、晴らしてください……！」

ほこらに財布を置き、手を合わせる……

『その恨み、引き受けた……』

「…一連の騒ぎは八重屋だったのね」

「…これだから人間ってのは。鬼よりタチが悪い…」

「あら、鬼のほうが残酷でしょう?」

幽々子が萃香を睨み付ける。元人間として、ひとくくりになれたのが腹立たしいようだ。

バン!

「鬼があいつら以上の外道というのか!」

目の前の柱を殴り、萃香が凄む……。

「止めなさい二人とも!だからこうして私たちで大掃除するんですよ?」

その言葉に二人は黙る…。

「…的は八重屋主人、与左衛門。番頭の米助。用心棒の嘉助。老中、菅野沢左衛門…」

「一人多いよ。私たち三人だから」

「…私がやる。じゃあ、行きましょう…」
傘をとり、紫が立ち上がる…。

フッ……

神社は闇に包まれた…

街中にて…

「ふう…。やっと終わったなあ…」

「ま、これで全部片付いた！一杯いこうぜ」

「なあ、あんた嘉助さんと米助さんだね？」

「誰だい？」

「あ、嘉助さん！もしかして前に酒屋で啖呵切ったっていう女では？」

「いかにも、その女、伊吹萃香さ。暇だから飲み比べがしたくてねえ、どうだい？」

「面白い、受けてたとう！」

「うー」

「どうしたい？もうへばったか？」

「…まだまだ！女子に負けてたまるか！…もつと熱爛持つてこい！」
もはや意地だけで嘉助は飲んでいる。二人とも既に顔は真っ赤で、
米助は既に飲み潰れている…

「…おい！どこ行くんだ米助？」

「ちよいと厠へ…」

「……全く」

ジヨロジヨロ…

「うー、しつかしあの女、たいした酒豪だ。化け物だぜ…」
用を足す米助に、ふわりと音も無く影が忍び寄る……。幽々子がゆ
っくりと、扇子を広げる…

ヒュン！

首の後ろを剃刀を仕込んだ扇子がぱつさりと切り裂いた！

「がはっ！」

「……あんたには似合いの死に場所ね」

パチン……

紅く染まった扇子をたたむと、音も無く消えていった…。

「嘉助とか言っ たな？次はあつちの店だ！」

「お、おう……。望むところだあ……」

嘉助はすでに千鳥足になっている。よほど飲んだのだろう。大事な刀を杖にしている……。

「おい、どこへ行くんだ？」

「……いい飲み屋があるんだ。強い酒が飲めるよ」

「どんなところだあ？」

グイッ！

腕がちぎれそうな程に引かれ、嘉助はいきなり路地裏に引きずり込まれる！

一瞬で首をつかまれ、嘉助の首を締め上げる！

ゴキン！

「ぐえっ！！」

骨が折れ曲がり、鈍い音が響き渡る……

「…地獄でたらふく飲ませてやるよ。あんたが倒れてでもね」
ひょうたんの酒を飲み干すと、雨粒よりも小さく散って消えていった……

八重屋にて

ジャランジャラン！

「米の値はまだ上がる…今年は大儲けだ」

笑いながら与左衛門 は銭勘定をしている……

フツ！

突然、ろうそくが消えた！部屋は閉めきっている。ろうそくが消えるはずはない…
普通ではあり得ない事態に恐れおののく！

「一体…」

ザシュツ！

「あぐっ！」

心臓を一突きに、傘が貫いた！！

「……あんたの価値は、一分銀にも満たなかったわよ……」

グシュッ！

最後のとどめに傘がさらに心臓をえぐる！！

「…うああ…」

ドサッ……

血まみれの胸を抱え、床に突っ伏した……

老中、菅野沢左衛門の家にて

ギシッ、ギシッ…

菅野は廊下を歩いている。どうやら廁に向かうようだ。
紫は廁に先回りし、戸板の影で傘を構える！

ギシッ、ギシッ…

足音が次第に大きくなる…。息を整え、その時を待つ。自然に、持
っている傘に力が入る……。

「ぐあっ！！」

「！？」

叫び声に驚き、廊下を覗き見ると、菅野が倒れていた！！

辺りを見渡しつつ菅野に近づくと、首が鋭利な刃物で斬られている……。

だが、辺りには刃物は見当たらない……。

謎が残る中、紫はスキマでその場を後にした……。

第三話・物価操作（後書き）

第三話、いかがだったでしたか？

元ネタはもちろん、ガソリンの値上がりです。金の無い大学生には痛いです…。

老中、菅野沢左衛門はお察しの通り、菅総理と小沢一郎より作成しました。

菅野を殺したのは誰か？第四話をお楽しみに！

第四話・流言飛語（前書き）

この世の正義と悪の道、境ははっきりいたしやせん……

灰に染まる境目は、閻魔様でなけりやあ、わからんでしょう……

それでもわかる真つ黒な悪、そいつは誰が裁くのか？

神や仏じゃ満ち足りぬ、人じゃこの世の底は見えぬ……

だったら私が裁こうか？

片手に傘を握りしめ、人に有らざる者が行く…。

姉ちゃん、姉ちゃん…

どこいくの？

私は必殺仕事人

八雲紫と申します……

前回の『物価操作』の続きからです。

仕事の的、老中、菅野沢左衛門を何者かに殺された紫、その続きで

す。

第四話・流言飛語

江戸の外れにあるさびれた神社、そこに映る三人の影…。しばらくの間、誰も話さず重い空気が流れる。

「……で、結局のところ菅野を殺した奴はわからないのか」
沈黙を破り、その中の一人が話し始める…。

「そうなのよ萃香。私が来たときにはもう遅かったわ……。手がかりも何もないし…」

その言葉にまた空気が重くなる。そんな中、幽々子がふと、語りだした。

「…ねえ紫、今回仕事した奴らの葬式に行ってみない？」

「え？」

「犯人が葬式を遠巻きに見物するかもよ？確実に仕事をしたのか確認するためにね」

二人がうなずき、立ち上がる。これ以上ここで頭をひねっても仕方がないようだ。

ろうそくを消すと、三人はスキマの中に消えていった…

翌日

「はーっ、大した葬式ねえ……」

菅野の葬式を遠巻きに紫は眺めていた。老中だけあって豪華な花輪が門に立て掛けてある。

参列者も多く、二本差しの男達が喪服姿で列を成していた。その有り様を庶民達が見物している…。

「……！？」

その中で感じる異様な気配。隠してあるが、かすかに漏れでた妖気が疑問を確信に変える！！

ザッ！！

振り返り、辺りを見回す。大勢の人だかりの中、菅野の家から離れていく人の中に見えた一人の少女に目が釘付けになる！

（こいつか…）

垣間見えた藍色の着物の少女を、人混みかき分け進んでいく……。

ザッ…

「ここは…」

着いたのは人気のない河原だった。そこにぽつんと建つ一軒のあばら家に少女は消えていく…。

住むには適さず、他に家もない。

「……」

辺りを見渡し誰もいないことを確かめると、戸板に張り付き、ゆっくりと手をかける…。

ギッ…

鈍い音がかすかに響く。ほんの一寸ほどの隙間からのぞき込むが、中は暗く見えない……。

手が汗ばみ、鼓動が胸に手を当てずとも伝わる程に大きくなる。もう一度、しっかりと戸をつかみ、引く……。

その時だった！！

「……」

背中に感じる冷たい感觸。見ずともそれが金属であることが感じ取れる……。

背筋が凍り、脂汗が流れ落ちる…。

「……何の用だ」

低く、くぐもった声でつぶやく。冷たい殺気が溢れだし、紫の背に当てられた小刀に一層力が入る。

「……菅野をやったのは、あんたなんでしょう？何のつもり？」

冷静さを何とか取り戻し、いつもの飄々とした態度に戻る。

どうやら、裏口から回って後ろを取ったようだ。その事に気付かないとは…。

自嘲気味に笑みが自然とこぼれ出た。

「私は流しの仕事人。とある人の恨みを晴らしただけさ」
感情を込めず、無機質に返す。なおも小刀を押し付け、紫の着物を徐々に貫いていく…。

「あんたも、か…。悪いけど、手は出さないで欲しいわね」

「偉そうに言うな……。どうなってもいいのか？」

「そうかしら？少なくとも対等の立場と思うけど？」

「！？」

背中を感じる鋭い『もの』に、冷静な態度が一変する！
話している間にスキマを通じて背中に押し当てた傘が、その長い針をあらわにしていた……。

「さあ、いい加減面と向かって話さないかしら？河童さん？」

「……何もかもお見通しって訳か…」
戦意を無くし、力なく小刀を下ろす。と同時に、紫も傘をしまい振り返る…。

「やっと顔が見れたわね」

振り返った先にいたのは、まだあどけなさの残る少女だった。短くまとめた二つの結び目がそれをなお引き立てている…

「私は河城にとり。表では『からくり屋のにとり』で通っている」

「八雲紫。幻想郷の最古参、といったところかしら？」

「紫様！？あの！？」

口に手を当て、2、3歩後ずさる。驚き、目を見開いたまま固まった後、やっと現状を理解した…。

「紫様とは知らず、申し訳ありませんでした!!」
慌てて取り繕い、深々と頭を下げる!

「頭を上げて。別にいいわよ。でも……」

「？」

「“仕事”は止めてもらえないかしら?人に有らぬ者は捕まってはならない。他の者の迷惑になるから」

「……」

紫の目付きが一変し、大蛇をも喰らい尽くさんとする気迫でにとりを睨み付ける……。

全身の血が通わないような錯覚の中、紫がさらに続ける。

「私達は皆、あらゆる方法で身を隠せる。でも河童のあなたはそうはいかない……」

「……」

返す言葉が無くなる。それは確かな現実だった。妖力でもからくりでも姿を隠せない……。

「……裏稼業から手を引きなさい。何の因果で始めたか知らないけど、これからは私達がやるわ。もし、あなたが人に捕まったり、殺しを見られたその時は……」

スウッ！

またも開いたスキマから、針が出た傘が背中に押し当てられる！

ビクッッ！！

「……死んでもらうわよ？」

それだけ言い残すと、河原を背に町中へと紫は消えていった……。

その夜、町中にて

「いらっしゃい！あら、にとりさん！」

「…熱爛ときゆうりの漬物」

「はい！」

ざわめく飲み屋の一角に腰かけ、ため息を一つつく。まさかあの紫様と会う日が来ようとは…。

周りの喧騒が遠くに聞こえていた…。

「お待ちどうさま！」

「ああ、ありがとう」

熱爛を注ぎ、一気に喉に流し込む。ダメだ……。今日はよほど飲まない限り酔えそうもない。

先程の恐怖が今も、おちよこを持つ手を震わせる…。

「…ふーっ」

「いい娘が一人で酒を飲むものではない。物騒だぞ」

「……誰だい？」

普段ならこんな風につっけんどんではないが、話しかけられたくない気分だったのに水を刺され、ムツとする。

にとりの前に立つ男は、武士だった。整ったまげに小綺麗な着物。顔つきから生真面目な性格らしいことが見てとれる。

「私は駿河藩の武士、大川内重綱と申す」

「駿河？あの、火山が噴火したっていう？」

意外な人物に、急に態度が変わる。それは三日前のことだった。瓦版で読んだ記事で、火山の噴火を知ったのだった…。

「そつだ、その駿河だ」

「……大変らしいね。何でも名産品の一つ、茶葉が灰で全部ダメになったとか」

「何を申す、使い物にならんのはほんの一部。大半はきちんと使えるぞ！？」

「え！？」

あまりの食い違いに目を丸くする。確かに瓦版では『茶葉がほぼ全

部壊滅的な被害を受けた』と書いてあった……。周りの者達は皆、酒に酔ってこの話に気付かない…

「誰だ、一体誰がそんなでたらめなことを！」

大川内も驚き、にとりの肩をつかみ揺らす！

「ま、待った！とにかく、家に来なよ。その事が書かれた瓦版がある」

「しかし…」

そこでようやく揺らすのを止め、向かい合う…。動揺しているのは既に明らかであった。

「構やしないよ。あんたも宿代が浮くじゃあないか」

「…うむ、事を確かめねばなるまい。かたじけない、お世話になる」

川沿いのにとりの家

辺りはからくり細工に使う木材や竹が整頓しており、部屋の中央にある囲炉裏には手入れされた道具箱が置いてある…。

「まあ、かけてくれよ」

「ああ…」

囲炉裏の側に腰を下ろし、家を見渡す。普段から掃除してあるのだ

ろう。きちんと整理され、障子も穴一つない。
女子一人で暮らしていることは明らかだった。家の外見は少しぼろぼろだが、内面だけでも美しくする気性を感じる…

「ああ、あつたよ。これだ」

タンスから一枚の瓦版を差し出す。重大な出来事はこうしてタンスにしまっておくのがにとりの主義だった。

「これが…誠と申すのか!？」

瓦版を握りしめ、わなわなと震えだす…。その目には困惑と憎悪がにじみ出ていた……

「私は生まれも育ちも駿河の国、国のことはよく知っている! 国を発つたのは一昨年のこと。発つ前に親戚を探して駿河中を駆け巡ったが茶葉は無事だった!」

「ってことは……この瓦版が間違ってるってことかい!？」
あまりの食い違いに二人はただ顔を見合せる……

「にとりさん、この瓦版を刷っているのは？」

「四谷だよ。あのお上公認の」

「何てことだ……」

顔を手で覆い、天井を見上げる。目の前の現実には飲んだ酒を全て戻しそうな程のめまいを大川内は感じていた…。

「にとりさん……」

にとりと目を合わせ、姿勢を正すと深々と頭を下げた…

「酒場での無礼、申し訳ない！確かに瓦版はそう書かれていた！」

「おい！止めてくれよ！頭上げてくれ！」

「数年前に家を出て、江戸にいる弟に家族の安否だけでもと参ったのだが…。」

あなたに会わなければこの重大な事実気付かなかったやもしれん。かたじけない……」

「大川内さん、まさかあなた…」

「うむ、四谷に行き、この誤りを正してもらおう！」

「……危険だ。お上公認の四谷がそう易々と過ちを認めるとは思えない……」

「しかし…」

「……とにかく、もう寝ちまおう。夜も更けた…」

フッ！

一瞬で家は闇に包まれた……

翌朝

「ふあああ……」

眠い目をこすり、顔を洗いに玄関の戸を開ける…。外は快晴、まばゆいばかりの光が降り注ぐのが障子越しにも見てとれる。

ガラッ！

ジャリン！

「ん！？」

突然降ってきた封筒。その中にはいくらかの銭と手紙が入っていた…。
手紙を手に取り、ゆっくりと開く……

『前略、にとりへ

昨晚からのお心遣い、ありがたく存じ上げる。

にとりに出会わずにこの事実を知らず国に帰ったならば、私は一生後悔しただろう。

感謝の意をこめて、少ない銭だが差し上げる。あなたもどうか末長く幸せであってくれ

大川内重綱』

「つたく、あの馬鹿……」

そう言うが早いのか、家に戻り着物を羽織る！

少し帯が乱れているが気にしない。四谷めがけて走り出す！

Bannon!

「おい、この記事は何だ!!」

四谷の前は騒然としている。大勢の野次馬が見つめる中、怒鳴り散らす大川内は瓦版を撒き散らす!!

「はあ、そう申されましても…。調べた上での瓦版ですよ?」

店主の幸右衛門が額の汗を拭いつつ苦笑いで返す。

「さ、お引き取りを……。それとも、何か証拠でも?」

「私がこの目でちゃんと見た!!」

「それでは茶を飲んで無事かわからんでしょう?」

「飲んでいる人もちゃんといた!!」

「見ただけでは証拠にはなりませんまい……。どうです、乾いた喉を潤しに参られては……」

そついい、十両を大川内の手に握らせる……

「こんなもの!!」

ジャラアアン!!

十両を投げ返すと、大声で怒鳴る!

「これがお前達のやり口か!!もういい、私が真実を伝える!!」

それを最後に、四谷を後にしていく……

「大川内さん……」

息を切らせてにとりが駆け込む！

「にとりか……。少し手を貸してはくれぬか？」

「ちくしょう！！」

河原で一人、座り込んで水面に映る月に石を投げ込んでいた……。一日中かけて多くの瓦版を刷る者たちに声をかけたが、記事にしてくれる者は誰一人としていなかった……

「ふーっ……」

キンッ！

「！？」

闇夜に響く甲高い金属音、その音色が身の危険を即座に知らせる！

「！？お前は……」

ザシュッ！！

「ぐあっっ……」

袈裟がけに一刀両断、鋭い剣先が斜めに切り裂く！！

ドサツッ…

ザッ、ザッ、ザッ、ザッ……

「！？ちいつ……」

不意に聞こえた足音に、刀を納めてその場を離れていく……

「大川内さん！！見つけたよ……。こっちも駄目だった……。」

「！！！？？」

提灯の明かりがその変わり果てた姿をようやく照らし出した……。

「大川内さん！！」

「……に、とり……」

「喋ったら駄目だ！！すぐに医者……」

「……す、駿河の誇り……取り戻してはくれぬか……」

「ああ、わかった……。わかったよ……」

「お主には……迷惑を、かける、な……」

「気にするなよ……。こんな、時に……」

カラン……

「うあああ……」

河原沿いの暗闇に、水音に消えるほどかすかな声が流れていった……

翌晩……

ザッ……

一寸先も見えぬような闇夜の中をかき分け、格子状に組まれた木々をまたいでいく。

時折蜘蛛の巣が引つ掛かる中、にとりは床下を奥へ奥へと進んでいく……

ザッ……

足が止まる。闇の中で確かに感じる気配。目を閉じ、耳を澄ます……

「いやはや、全くうちの馬鹿どもがあんな誤りをした時は冷や汗が出ましたわい……」

「まあよからう。これぞ瓢箪から駒、わしにしてみればありがたい……」

「ええ全く……。私にしてもありがたい。これも与力の頼長様のお力添えの賜物でございます。

お上にこの誤りが知れたら……」

「ふふふ……。お互い命は惜しいからのう……。後は真田、任せたぞ？」

「はい…。これで駿河の茶葉は売れず、農家が路頭に迷う……。そうすれば…」

「茶葉に適した広大な土地は全て我らの物に……。買い占めた後に誤りがわかって、売った後では……」

「文字通り“後の祭り”じゃな？」

「はっはっはっは……」

ジャラ……

小銭を置き、ほこらの前に正座すると、静かに語りだした……

「……私なぞの河童ふぜいが言うのも何ですが、私はどうしても大川内さんの恨みを晴らしてやりたいのです……」

うつむいた顔を上げ、さらに続けていく……

「私だけではどうしても手が足りません。でしゃばった真似だと存じていますが、私の仕事を手伝ってもらえないでしょうか!!」

『……その恨み……引き受けた……』

「…話はわかったけど、大丈夫なの？その河童ちゃん」

「私が見た限りじゃあね。的は、四谷の主人、幸右衛門。用心棒の染吉。問屋の主人真田吉次、与力の跡部頼長……」

ジャラ…

「……わかった、行こうじゃないか」

錢を握りしめ、一人闇の中に消えていく……

ジャラ…

「ええ、行きましょう……」

扇子を閉じ、錢をまた一人、握っていく…。

ジャラン…

錢を手のひらに落とし……

フツ…

神社は闇に包まれていった……

料亭、枳屋にて……

「はっはっは……。ささ、頼長様のお相手を……」

「はっい！」

宴会は酒と芸者で盛り上がり、誰もが顔を赤らめている……。部屋には酒と白粉の香り、三味線の音が鳴り響く……

「……うーっ」

「どうされました？真田さん」

「いやあ……ちよいと厠に……」

ギッ、ギッ、ギッ……

「ふう、暑いのお……」

芸者の三味線や歌を聞きつつ、暗闇の廊下をろっそく一つ片手に歩く……

「ん？」

廊下に置かれた一枚の紙に目が止まる。

ボキン、ボキン……

骨が鈍く、暗闇の中に鳴り響く……

「これは……受け取り書？一体何の……」

そよ風が吹き、塵芥が集まりだす……！

ガッ！！

首根っこを掴み、握りしめる！！

「かはっつ……」

「おめえさんの命、確かに頂いたよ……」

「あ、あ、あ……」

ゴキン！

首の骨が一瞬でねじ曲がり、目が虚ろになる……

「あぐっ！」

ドサツツ……

力なく、その場に倒れた……

「真田様、遅いのう……」

「見て参りましょうか？」

「ああ、頼むよ」

ギッ、ギッ……

ろっそく片手に、一人染吉が歩き出す……。

ジイ……ゴロ……
ジイ……ゴロ……

「ん!？」

闇に響くゼンマイの音……。無機質な機械音が廊下に鳴り響く……

キュポン

竹筒のフタを開け……身構える……

ダツ、ダツ、ダツ……

「これは……」

廊下を歩く一体のからくり人形。その両手にはお茶が乗せてある……

「何で……」

廊下のからくり人形を手に取り、しゃがんだ瞬間!!

立ち上がり、竹筒を投げる!!

ヒュン!!

バシッ!!

「あっ!!」

竹筒から放たれたからくり蛇が首に巻き付く!!

ギ、ギ、ギ、ギ……

なおも絡み付く蛇はその力を増していく!!

「ひ!？」

蛇の先端は鋭くとがり、さながらマムシの牙を思わせる……

ザシュッ!!

その牙が首に突き刺さり、息の根を止める!!

ドサッッ…

ヒュン!

瞬時に蛇を竹筒にしまうと、闇の中に消えていった……。

「うつむ…二人ともどうしたのだろうか？」

「放っておけ。どうせ大したことじゃない」

「そうですよ。ささ、頼長様どうぞ」

芸者の一人が酌を進め、その肩に寄り添う…。

「ふふっ、なかなかめんこいのお……」

にやついた顔で肩を抱き寄せる…。吐く息は既に酒の匂いでいっぱいになっていた……

「ふふっ…。ねえ旦那様、目隠し鬼でもしませんか？」

「ん？何だいそれは？」

「簡単なことです、旦那様が目隠しをして、声を頼りに私を捕まえてくれればよいのです」

「ほう……。いいだろう。さあ、三味線を頼むぞ」

「はあい…」

『鬼さんこちら、手の鳴る方に…。鬼さんこちら……』

「ふふっ……。こちらですよ……」

「あ、こっちかな？」

「こっちですよ」

バツ！

扇子を開き、舞い踊る。蝶のように軽やかに、ひらりひらりと女は暗い部屋に消えていく…。

「そっちかなあ？」

おぼつかない足で何も疑わずに距離を縮める頼長、そして……

「鬼さんこちら……」

「お、捕まえたあ！」

暗闇の中、幽々子に抱きつき、胸に顔をうずめた…

次の瞬間!!

ザシュッ!!

「がっ……」

扇子に仕込んだ剃刀が、首の後ろを鋭く切り裂く!!

「……旦那様は、悪鬼だ……」

ドサッ……

抱きつく頼長を振りほどくと、音もなく消えていった……

『鬼さんこちら……』

「あら、旦那様？」

一人の芸者が異変に気付き、近寄る。他の者達も異変に気付き、三味線を止める……

「きゃあああ!!」

「頼長様!？」

幸右衛門も近寄り、体を揺する……

「ひい……血、血だあ……」

とたんに料亭が慌ただしくなり、店の番頭や女中が集まる!!

「ひえええ……」

すっかり腰が抜け、走って店を出る。羽織った上着も置き忘れていくが、一切気がつかない。唇が震え、歯がカチカチと夜の街に響く……

すぐにここを離れなくては!それだけが脳裏に浮かんだ…。

「どうかされたのですか?幸右衛門の旦那?」

「おう……その娘。い、今殺しがあつたんだ!!と、と、とにかく奉行所に……」

「奉行所?」

「それと、かごを呼んでくれ!!早く!!」

「かごを?いえ……それは間違いでしょう?」

「え?」

ヒュン!!

グシュツツ!!

不意に飛んできた傘が腹を貫く!

「ぎゃあ!!」

「あんたを運ぶのは、地獄の火車だ……。灼熱地獄行きの、片道切符だよ……」

ドサツ……

砂の上に倒れ伏した……

地面が紅く染まるのを眺めつつ、闇の中にスキマが開き……。そこには誰もいなくなった……。

河原にて…

殺しがあったのが嘘のような春風の中、にとりはその中にいた……

遠くに子供達の笑い声が聞こえ、咲き誇る菜の花が春の到来を思わせる……。

「……弔い、かしら？」

背中越しに、ふと紫が話しかける。にとりの手には線香と菜の花が握られている。

「私くらいしか、弔う人もいませんから……」
ぽつりとつぶやき、手を合わせる……

しばし流れる静寂を破り、紫が切り出す。
「ねえ？」

「はい」

「私達の仲間にならない？」

「え？」

「私達は、人様から金をもらい、恨みを晴らす悪党……。だからこそ、欲しいのよ。地獄の道連れが……」

「……私で良ければ、お供しますよ……」

それだけ言っと、二人は笑いあつた……

第四話・流言飛語（後書き）

第四話、『流言飛語』いかがでしたか？

相変わらず表現や地の文に悩まされていますが、何とか書き上げられました。

元ネタは災害時に流れるデマや風評被害です。激務に追われて東電の方々が誤報をするのはわかりますが、悪質なデマには憤りを感じこのような形になりました。

登場した四人目の仕事人、河城にとりですが、元ネタは完全に『必殺仕事人2009』の“からくり屋の源太”です。

双方のファンの方々には不満な方もおられるでしょうが、源太もとりに大好きな私にはこれを書きたかったのでこうなりました。

殺しの技も全く同じですが、気に入って頂けると嬉しいです。

また今回より前口上をつけてみました。

その方が雰囲気が出ると思ったのですが…いかがでしょうか？

次回はまた違う仕事人が前口上を述べますのでご期待下さい。

また、皆さんからも前口上を募集しています。感想欄、レビュー、どちらでも構いません。

ではまた……

第五話・仏面鬼心（前書き）

春は夜桜、夏は月

秋は紅葉に冬は雪

酒を片手に我先に

百鬼夜行を従えて

くるりと後ろを見てみれば

人の体でありながら、冷めた心で世を渡る

弱きをくじく赤鬼に、心を遊ぶ青鬼よ

あんたは誰が退治する？

この世は冷めた無味な町、おとぎの勇者はいやしない……

ならば私が裁こうか？

この世を夢み、酒を飲む

人が恐れた強き者

私は必殺仕事人

伊吹萃香と人は呼ぶ……

第五話・仏面鬼心

「ありやま、時期はすでに遅かったか……」

江戸の外れの神社の一角。爽やかな風が吹き抜ける中、一人の少女が桜の下にたたずんでいた。

左手には一升ほど酒の入ったとっくり、右手にはイワシの目刺しを手をしている。

「これじゃあ、わびしい桜吹雪だねえ……」

ひらりと舞い落ちたひとひらの花びらを手に取ると、ふっと吹き飛ばし、しかめっ面をする。

神社の桜は満開をとくに越え、葉桜となっていた。枝に点々と芽吹いた若葉が五月の到来を思わせる。

桜の下で鬼の四天王、伊吹萃香はあごをかきつつ思案に暮れていた。ちくしょう、江戸の連中とも飲もうと思っていたのに……

ここ最近で幻想郷の連中と花見酒をやっていたらすっかり忘れてしまっていた。流石に五升は飲み過ぎたか……。鬼といえど少し頭が重い。

「ま、人がいりゃ酒は旨いもんかな」

見た目を一瞬で人間らしく変えると、葉桜を背に町へ歩き出す。すっかり温かくなった風が黒くなった萃香の髪をなでいくのだが……

「ん!？」

小高い神社の上から眺めた江戸の町が、何時もとは違う雰囲気を醸し出していた。

江戸の一角に立ち上る、いくつもの煙。その煙は何本も何本も、揺らめいては空に消えていった……

「……こりゃあ、何かあったな」

とつくりを肩に担ぎ直すと、一目散に江戸の町へ歩き出していった……。

江戸の一角、虎ノ門

江戸城の南に位置し、神田川の上水が流れる支流の一つがある。

町は以前と変わらなかったが、そこでも不穏な空気が流れていた。前よりにぎわいもなく、人々はみな、瓦版に目を通して……

町の雰囲気に違和感を覚えつつ、辺りを見回しながら歩く。その中に二人の見覚えのある背中を見かけた。

「あ、おーい！文二に与一！！」

「あ、萃香の姉御！？」

「ご無事でしたか！！」

声をかけられ、二人の職人が振り向く。藍色の着物にねじり鉢巻き、片手に担いだ道具箱がいかにも江戸の“粋”を思わせる。

二人は以前、米の値上がりの際にひよんなことで意気投合した飲み仲間で、二人とも根っからの酒好きである。

飲み比べをした際に皆が酔いつぶれたのに萃香はけろっとしていたことから、萃香は『姉御』と飲み仲間から呼ばれるようになっていた。

「……何かあったのかい？」

辺りを軽く見回しつつ、萃香が尋ねる。その言葉に二人とも視線を落とすが、やがて与一が重い口を開き始めた。

「……実は……」

それは、昨日のことだった……

カーン、カーン、カーン、カーン……

時刻は戌の刻【午後十時】。とつぷりと暗くなった江戸の町に、甲高い半鐘の金属音が鳴り響く。

鐘の音は江戸中に広がり、夜だというのに誰もが外から、あるいは二階の窓から、その光景を眺めていた……

「おとつつあん！！おつかさん！！」

「母ちゃん！！母ちゃん！！」

「おい水だ！！水持ってこい！！」

闇夜の江戸に燦々と輝く紅蓮の花。それは風にあおられてなおも激しさを増していく。

江戸の北側から始まった大火は春風に乗って天をも焦がす程に大きくなり、熱く、熱く、町も人も呑み込んでいった……

「……なるほど、そういうわけかい」

「ええ、だから皆、親しい人が無事かどうか瓦版を見ているわけだ……」

唇を噛みしめつつ、文二が答える。彼もまた、他人事ではなかったのだろう。その顔にはやるせなさとしがたが浮かんでいた……

チリーン、チリーン……

「何だ？」

不意に、通りに甲高い鐘の音が響く。その音色に振り向くと、そこには十数人の僧の集団が列をなして歩いていた。

全員、きちんと法衣を身にまとい、列の先頭には黒の頭巾をした僧が歩く。

僧達は皆、手に木箱を持っている。その姿に町人たちが集まり出す……。

僧たちが横一線に並ぶと、頭巾をした僧が語り始めた。

「今度の大火で多くの方々が亡くなられ、何もかもを失いました。それはこの江戸での話。他人事ではございません。」

そこで、皆様方にお布施を頂戴したく参りました。どんなに小さなお金でも構いません。お布施を払った方には寺のお札を差し上げます。

また、頂いたお布施は全て、大火に逢われた方々にお配り致します……」

「誰だい？あの坊主は？」

「知らねえんですかい！？」

はつと萃香に目をやると、与一が口を開けたまま聞き返す。

「増上寺の住職、源田宗純げんだそうじゆんですよ！」

文二が間髪入れずに説明する。

「そんなに有名なのかい？」

「そりゃあもう……。貧しい人を救う為に自らの生活を切り詰めて、浄財をお作りになられているとか……」

「へえ……」

それだけ聞くと、萃香は宗純の元に歩き出す。

「姉御？」

「ごそこそ……」

着物のたもとに手をつ突っ込むと、勢いよく金を取り出す！！

ジャラン！！

「持っていきな！！」

それだけ言つと、黄金色に輝く小判を宗純が持つ箱に惜しげもなく突っ込んだ！！

「い、一両を！？」見ていた町人たちが騒ぎ出す！！

「姉御……！！」

与一と文二はただそれを見つめていた。

「さ、行こうかね」

僧たちに背を向け、萃香が人の目を集めつつ歩き出す。

「ありがとうございます。あの、おれは……」

感謝を込めて手を合わせつつ、少ししゃがれた声で宗純が呼び止める。

「いないよ。神の世話になる気はないし、それに……」

「それに？」

左手のとつくりを宗純の前に突き出すと、笑って一言つぶやいた。

「神に助けを請おうにも、どうやってもわたしやあ、坊さんみたいに酒を止められないからねえ」

「ははははは……」

「よっ！日本ー！！粹だねえ……」

一部始終を見ていた町人たちが騒ぎ出す。拍手に指笛が鳴り響き、笑顔がパツと全員にこぼれる！

「こうしちゃあいらねえ！ほれ、持っていきな！」

「俺もだ！」

ジャリン！ジャリン！

萃香を皮切りに、男衆が負けじと銭を箱に放り投げていく！

「姉御……。いやあ、お見それしました！！」

文二と与一が頭を下げて出迎える。二人ともスツとした笑顔だった。

「あつしも、及ばずながら入れてきます！」

「お、俺も！」

二人も負けじと、人でごった返している中に飛び込んでいった！

「今日はいい酒が飲めそうだねえ……」

一気に明るくなった町のにぎわいを、萃香はただ笑って眺めていた……。

その夜

真つ暗になった町外れを、二人の僧が歩く。提灯の淡い光だけを頼りに、二人はただ一本道を歩いている…。

「今日は素晴らしい方々に出会えましたね。早雲^{そうつん}？」

宗純が満面の笑顔で尋ねる。今日のことがよほど嬉しかったらしい。

「ええ、宗純様。これで…」

「はい。多くの方々を救えます。温かい人のぬくもりを知りました」
宗純は目を閉じ、手を合わせる。

その闇夜にうごめく二つの影。一人は前から、一人は後ろから徐々に間を詰めていく……

「え？」

不穏な空気を察した宗純が辺りを見回す。だか後ろにも黒頭巾を被った侍。なすすべもなく二人の僧は身を寄せ、交互に侍を見る……

スラッ……

何も言わず、前からきた侍が刀を抜く！月光を受けて銀の波紋が闇の中に輝く……

刀を振り上げると、全身に力を込める。同時に後ろの侍も刀を抜き、中段に構える。

「何を致す！！私達が今持っているのは人々からの浄財ですぞ！！」

ヒュン！！

「かはっ……」

ためらいもなく降り下ろされた刀は、左胸から右斜めにバツサリと宗純を斬り裂いた！！

「早雲……お逃げ、なさい……はや……」

ザシュツツ……

頭巾の男がうつ伏せになった宗純の背中を一突きにした……

「これで話は上手く行く……」

頭巾の男が刀を抜くと、静かにつぶやいた……。

翌日

「……何てこつた……」

萃香はただ、その光景を眺めていた。

宗純はそのまま息絶えていた。無論、手にしていた浄財は全て消え失せていた……。

現場の一本道には数珠や頭巾、提灯が散乱しており、その時の凄惨さを感じさせる。そこでは早雲と寺社奉行たちが話していた……。

「それで、早雲とかいったな？宗純様が斬られた後、お主は？」

「宗純様から預かった浄財を手に逃げたのですが、逃げる最中に背中を斬られて気を失いました。」

下手人は私が死んだと勘違いして、とどめを刺さず浄財を持って逃げたのです……」

うつむき、涙ながらに早雲が語る。早雲の法衣からは幾重にも巻かれた包帯が見える。

「なるほど……」

それだけ聞くと、萃香はその場を後にした…。

「ふーっ……」

店が並ぶ通りの一角、空き家になったあばら家に入る。人がいないのを確認するとため息をついた。

懐のひょうたんに手をかけると、ぐっと一杯飲み干すが、とてもいい気にはなれない……

「萃香…さん？」

「……！？」

驚き、飲んだ酒が逆流しそうになるのをこらえて振り向く。その先の見慣れた影を見ると、大きく息を吐いた。

「……何だ、からくり屋の…」

「にとりです。残念なことになりましたね……」

辺りをうかがいつつ、明かり取りの窓から小声でにとりが話しかける。彼女もまた、宗純の現場に居合わせたのだった。

「ああ……」

「全く、物取りだなんてねえ……」

「にとり。あんたにやあ、あれがただの物取りに見えるのかい？」

「え？」

「あの現場はおかしい。考えてもみな。本当に物取りが襲ったんなら、何で提灯が何事もなくそこにあるんだい？」

「あ……！！！」

そこでにとりも、事の真相を感じいた。目を見開き、萃香の話に耳を傾ける。

「夜に襲われて提灯を放り投げたんなら、当然提灯の中には火のついたらうそくがある。

火のついたろうそくが入った提灯を横に倒したりしたら、溶けたろうが垂れて外周の和紙に火がつき、真っ黒に燃え尽きているはずだよ……」

「じゃあ萃香さん……！？怪しいのは……。でも何故提灯を？」

「恐らく、夜の犯行である事を強調したかったんだろうね。ちよいと行ってくるよ」

そう言くと、萃香の体が塵あくた程に小さくなり、風に舞う砂のようになくなっていった……。

その夜、増上寺

霧のごとく散った萃香は堂々と寺の中にいた。無論、人には見えやしない。

たとえ僧が妖気を感じたとしても、目の前に鬼がいる事など夢にも思わないだろう…。

寺の離れに、早雲と三人の男がいた。三人とも刀を刺しており、一人はやけに身なりがいい。

位が高いのだろう、質のよさそうな羽織を着ている。

「十兵衛様。どうぞお納め下さい……」

早雲が丁寧を持ち出した手拭いの中には、光輝く小判の束があった。二十両はあるだろう。

「さ、平吉さん。又造さん。お二方も……」

同様に二人の侍にも小判を渡す。

「ふふっ……。しかし、主も抜け目ないのう。背中に傷まで作るとは……」

十兵衛が微笑み、酒を片手に小判を眺める…。

「これしきのこと、何てことございませんよ……」

「しかし、まさか師匠を手にかけるとはねえ……」

「…あいつは、あまりに世を知らんのさ。太平の世だというのに日夜修行に励み、手にした銭のほとんどを配る…。」

それが何だつてんだ！結局我らに見返りは来ない。他の寺はお布施でたんまり銭を持っているのに……」
酒に映る自らの顔を睨み付け、早雲が語る。

「今度の大火では、銭がいくらであつても札を配るだと？馬鹿馬鹿しい！！」

それで人は幸せでも、私に幸せはやって来ない！！だから……」

「ま、理由はどうあれ儂は銭が貰えりやそれでいい……」

「お頼み申します。上手く事を丸め込んだ暁には、今とは比べ物にならない程の銭を差し上げましょう！！」

「ああ、任せておきなさい……」

（なるほど、こういう訳かい……）

Bannon！！

（！？）

ろうそくの明かりのみの薄暗い部屋に、乾いた障子の音が響く……
そこにいたのは一人の僧だった。怒りに震えながら四人を見渡し、
叫び出す！！

「宋空……！！貴様……」

「早雲！！貴様よくも師匠を！お主は僧、いや！人のクズだ！！」

ガシャアン！！

お盆に乗った酒を蹴飛ばすと、早雲の胸ぐらにつかみかかる！！

「お前は…、お前は…！！！」

グシュツツ！！

「あ…」

腹にはすでに、小刀が深々と突き刺さっていた……！！

ドサツツ…

力なく、宋空は倒れ伏す。萃香はただそれを黙って見る以外に無かった…。

「甘いんだよ。あんたも、宗純も…。こんな世の中で、真っ当に生きてられつかよ……」

早雲はただ、倒れた宋空を冷たく見つめた。その眼には何の感情も無かった。

畳に広がる血を見ても動じず、何か物でも見るかのように見つめていた……

「十兵衛様。今日のところはお帰り下さい」

「ああ、後片付けは任せたよ」

「は…。では平吉さんと又造さんは大八車の準備を。私は騒ぎで起きた僧がいなか確かめてきます」

平吉と又造はうなずくと、その場を後にした……

全員が去って行ったのを確認すると、霧散した萃香の体が一点に集まりだす！

「おい！宋空！しっかりしろ！」

腹を抱え、うつ伏せに倒れた宋空の肩を揺さぶり、耳元に小声で叫ぶ！

「……う、う……。主は、一体……」

「……そんなこと、どうでもいい！すぐに医者を！」

すぐに宋空を抱えようとする。すでに法衣は血にまみれ、口からも血が吹き出していた……

「いいんだ……。それより、これを……」

震えた手でゆつくりと、血にまみれた財布を取り出す……

「町には……恨みを晴らす、ものが……いると、聞いた。これで……」

「おい！……ちくしょう！！」

財布を床に落とすと、静かに息を引き取った……

その夜、神社にて

「恨みの相手が坊主、ねえ……」

ろうそくの明かりのみの薄暗い中、扇子で軽くあおぎつつ幽々子がつぶやく。

「…………世も末ですね」

腕を組んだまま、にとりが答える。

ジャラン！

部屋の中央にある台に銭を取り出すと、紫が静かに語りだす。

「殺しの的は、寺社奉行若年寄の徳田十兵衛。浪人の平吉と又造。増上寺の僧、早雲…………」

ジャラン…………

銭を手に、にとりが一礼する…………

ジャラン…………

「その僧には、誰が道理を教えるのでしょうか…………？」銭を手に、幽々子がポツリとつぶやく。

ジャラン…………

「さあねえ…………そいつは口じゃあわからないでしょう…………」紫が相槌を打ちつつ、銭を手に取る。

ジャラン…………

「なら、閻魔が教えるまで…………。私達が連れて行ってな…………」萃香は銭を握りしめると、握りしめた手を眼前に持つてくる。目を閉じ、その銭に一礼する…………

フツ…………

ろうそくを吹き消し、神社は闇に包まれた…………。

河原にて

「ふーっ、終わった。僧はやはり軽いなあ？」
にやけた顔で平吉が語る。

「ああ、だがこれで……」

「あの銭は我らの物。ふふふふ……」

「じゃあ、私はこれで……」

「ああ、気をつけて……」

互いに礼をすると、十字路で二手に別れていった……

ジイ……ゴロ……、ジイ……ゴロ……

「ん？」

闇夜の中に響くゼンマイの音。提灯のみの淡い光では、平吉にははつきりと何なのかは見えない……。

走り去るからくり仕掛けを、平吉は何も知らずに追っていく。

キュポン……

ゆっくりと、にとりが竹筒のフタを開ける…。

屋根の上から平吉を睨み付け、その時をただ静かに待つ！

「これは…？」

からくり仕掛けを取ろうとしゃがみ、首があらわになった瞬間！！

ヒュン！！

竹筒を勢いよく振ると、からくり蛇がマムシのごとくうねりつつ、平吉の首めがけて飛んでいく！！

バシツツ！！

「ぐえつつ！！」

巻き付いたからくり蛇は、なおも力を増して首を締め上げていく！

ギ、ギ、ギ、ギ…

蛇とつながる紐を、にとりが更に引いていく！！

「かはっ、げほ」

平吉も振りほどこうと蛇に力を込めるが、喉がふさがれ思っように力が出ない！！

グイイイ！！

最後のとどめを刺すべく、より一層引いていく！！

グサツツ！！

蛇の先端が喉をばっさりと切り裂いた！！

ドサツッ…

ヒュン!!

瞬時に蛇を竹筒にしまつと、闇の中に消えていった……

「ん？」

通りの先に、又造は見つけた。白い布を被った藍色の着物の女。月夜を受けて、布からみえる雪のような白い肌が、より一層女を神秘的にしている……

「もし、旦那様……」

（ほう……。夜鷹か……）

その例え難い妖絶さに魅せられ、又造が近づく。布を上げると、更に惹かれた。

整った顔立ち、うるんだ瞳。そして柔らかな体つき……

ゴクリと喉を鳴らすと、その滑らかな頬に手をかける……

「いくらだい？」

「いえ、私は銭はいりません……。ただ、寂しいのでございます」
うつむくと、扇子を広げて顔を隠す……

「なら、楽しませてあげようか？」

にやけた顔で、幽々子の体を抱きしめる。柔らかな胸、甘い香りに幸せを感じた……

次の瞬間!!

ザシュツツ!!

「ぐあっ!!」

扇子に仕込んだ剃刀が又造の首を鋭く切り裂く!!

ドサツツ…

「……本当に寂しい男ね。金と女以外に幸福を見出だせないのだから……」

パチン!

扇子をたたむと、夜の闇に消えていった……

徳田亭にて

ジャラン……

ろうそくの明かりの下、小判を数えつつ、笑みを浮かべて十兵衛がつぶやく。

「ふふ、やはり同じ輝きでも、小判と大仏では天と地の差だのう……」

その背後が、徐々に裂けていく……。紫の裂け目には無数の目。その中に光る白い傘が、ゆっくりと十兵衛の背中に狙いを付けていく……

「仏の価値は、あんたにはわからないでしょう？」

「ん？」

グシュツッ！！

「う、ああ……」

キリの様に先端が尖った傘が十兵衛の背中に突き刺さる！！とたんに返り血で、傘が紅に染まっていく……

「地獄の餓鬼は、仏にすら会えないのだから……」

ザシュツッ！！

傘を引き抜くと、スキマの中に消えていった……

増上寺の庭にて

ザシュツ、ザシュツ……

汗だくになりつつ、早雲が土を掘り返す。彼の足元には木箱が置いてある。

時折辺りを見回しては、また土を掘っていた。

「おい……」

「誰だ!？」

不意に浴びせられた声に震え、辺りを見回すが誰もいない……
手にしているクワを構えると、視線をあちらこちらに向ける!!

ボキン…ボキン…

骨が鳴る鈍い音が、夜の寺にこだまする……

「見た…のか?なら、金をやろう、これで……」

両手に金をいっぱいに握りしめると、早雲が虚空に向けて叫ぶ!

その背後に、徐々にその姿が型どられる……。

闇に光る紅き眼、くいしばった歯、橙色の髪。そして何より、誇らしく生えた二本の角……

「おい!!」

「え?」

早雲が振り向いた瞬間!!

ガシツツ!!

伸びた手が首を力強くとらえた!!

その手は首がきしむほど強く、早雲を締め上げる!!

ジャランジャラン!!

「おま、え…いった…い…」

初めて見た鬼の姿に、驚きと恐怖で全身が震えだす……
手にした銭を落とし、必死にもがき苦しむ。腕を力一杯引つかくが、
萃香は一切動じない……

「地獄の鬼さ……。あたしは金を積まれても容赦しないよ!!」

ボキン!!

ドサッ……

鈍い音が寺に響くと、首がねじ曲がったまま早雲は倒れた……。

第五話・仏面鬼心（後書き）

第五話、仏面鬼心、いかがでしたか？

本当は鬼面仏心といって、見た目は怖いけど根は優しいことです。その逆なのでこんな題名にしました。本当にこんな四字熟語はありません。

仕事人も五話となり、お気に入りになっていた方も五件となり嬉しい限りです。

相変わらず地の文に苦戦してますが、楽しんで頂けたら幸いです。

今回は幽々子メインの話にしようと思っています。気長にお待ちください。

読了ありがとうございました！！

第六話・渦中之人（前書き）

願わくば この世に夢を したためて

常世の春を 祈りたらしむ

だけどこの世は 儂くて

桜の如く 人は消え

夢も願いも はらはらひらり

風になびいて 消え行くが

恨みの花は なほ咲かず

心の底に 染み付いて

ただ切なげに 積もりゆく……

心を痛む その恨み

拾い集めて 束にして

闇夜に咲かせて 見せようか

私は必殺仕事人

西行寺幽々子と申します……

第六話・渦中之人

江戸の一角、街道沿いの一軒の飯屋。そこに黒山の人だかりが出来ていた。

誰もがその光景に仰天している。その原因は…

ズズズズ…

「おじさ〜ん！もう一杯！！」

「あいよー！！」

立ち込める蒸気を受け、厨房の真ん前に座る一人の女がうどんをすすっている。

机には空になった井の山。店にいる人は皆、箸を止めている。その食べっぷりに驚く者、笑う者、張り合う者、反応は様々である。

注目を浴びている女性は汗をかき、時折手拭いで顔をぬぐう。

それでも足らず、淡い藍色の生地に白で桜模様が描かれた着物の胸元をはだけては雪のように白い肌に扇子で風を送り込む。

その悩ましい姿を横目で男たちが眺めている。そう、この女性は…

「幽々子姐さん、ずいぶんな食べっぷりですねえ〜！」

「大したもんです幽々子姐さん！！」

「こりゃあ、相撲取りにも負けねえだろうな！！」

何を隠そう、西行寺幽々子である。今日はお忍びで江戸のうどん屋に来ていた。

この人もまた、その見た目に似合わぬ食べっぷりで尊敬の念を集め

ていた。

発端はここで力士に人気の『カうどん』である。餅を入れ、一杯で十分に満足するようなうどんを、か細い女が何杯も平らげているのだ。

店では張り合ってカうどんを頼んだ男達が腹を抱えて苦しそうにしている…。

「あはは、少し食べ過ぎましたね」

上品に手拭いで口をぬぐい、唇を薬指でなぞる仕草が何とも色っぽい。

その食べる時の無邪気さと上品な仕草が男衆の目を捕らえて離さない……

「あいよ、カうどんお待ち！」

「わあ」

満面の笑みでカうどんをすすっていく。これほど多く、笑いながら食べてもらったら料理人として冥利に尽きるだろう。

「いや、幽々子さんみたいな客が来て頂けるとありがたいですよ！」
店の大将がうどんをすする幽々子を眺めつつ語る。幽々子の食べっぷりに影響されてか、大将もいい笑顔をしている。

「幽々子姐さんを一目見ようと客が集まりますからねえ！」

「あら、それどういう意味？」

「姐さん程の女なら、たとえ吉原の花魁と並べても引けを取らねえでしょう？」

「あら、お上手なんだから……」

照れ笑いを浮かべつつ否定するが、周りの男達はうなずく。

「ほんと助かりますよ。なんせ……」

店の大将はそこで口をつぐむ。他の男達も皆、渋い顔をしていた。

「どうされたんですか？」

「知らねえんですかい？」

「実は…疫病のような物が流行ったらしくて……」

「ああ、それでうどん屋さんにも…」

「ええ、そのあおりを喰らっちゃったってえ訳で……」
苦い顔で大将がうなずく。

成る程、道理で大将はこんなにありがたがっていたのか……。そんなことを考えつつ、幽々子はなおもうどんをすすっていく。

「ま、この分なら幽々子姐さんにゃあ関係ねえ話だな！」

「ははははは…」

江戸の町の一角に、大勢の笑いが響き渡っていた…

翌日

「成る程、確かに言われてみるとそうねえ……」

江戸の店を眺めつつ、瓦版を手に幽々子がつぶやく。他の店はそれなりに繁盛しているが、飯屋はどうも人が少ない。

その手にした瓦版に間違いは無いようだった。その内容とは以下の通りだった。

“ またも死者。 疫病は止まらず ”

『原因不明の疫病はまだ江戸に流行っている。一週間前の事件からすでに三件目。』

奉行所は「きちんと加熱をし、台所をきれいにしてくれ」と述べた。

なお、原因は何なのか、どう対応すればよいかはわかっていない

……」

「これじゃあ馴染みの店が大変ね。原因を突き止めなきゃあ……」

幽々子が向かった先、それは江戸の一角にたたずむ矢島診療所であった。

ここには多くの人がいる。患者だけでなく、疫病について聞きにきた者も多い。

診療所では医者がひっきりなしに各部屋を巡っていた。

その角に一人の少女がうずくまったまま微動だにしていない。

十二歳ほどのあどけない娘、朱色の着物に菊のかんざしが目に映る。

彼女もまた、疫病にかかった一人である。顔色が悪く、血の気が薄い……

「矢島様！この子をどうか治して下さい！」

彼女に付き添っている紺色の着物の女が叫ぶ。彼女の母親なのだろう。背中をさすりつつ、医者に涙ながらに訴える。

「しかし、おときさん……。薬を買わなければ私にはどうにも……」

「金ならあの店に出させればいいでしょう！？」

「……悔しい話ですが、証拠がありません。私が立ち入って調べましたが、何も不可解な事は……」

「そんな……」

崩れ落ちるおときを皆が遠巻きに眺める。周りの人々は目を伏せたまま、口々にささやく。その言葉を幽々子は聞き逃さなかった。

「全く、哀れな話だな……」

「ああ、娘のおたえちゃんの学問所合格が決まった矢先に……」

（合格？待てよ……確か瓦版には！）

たもとにしまった瓦版を広げ、記事をもう一度読み直す。

『なお、今現在までの疫病の死者は以下の通りである。』

米問屋坂上屋番頭、豊作。両替商泉屋番頭、弥吉。町人伝七……』

口元に手を当て、思考を巡らせる。そこにある一つの仮説が浮かぶ……

(…三人のうち二人はそこそこ売れている店の番頭。なら伝七は?)

瓦版をしまうと、幽々子は近くの男二人に声をかける。

「あの…もし?」

「ん?何だい?」

意外にも声をかけられ、二人は顔をほころばせる。無理もない。愛らしいつぶらな瞳。人に化ける為に黒く染めてもなお、絹糸のようになやかな髪。

鮮やかな紅が指された弾力ある唇。胸の谷間からほのかに漂う白梅紅の香り…。男心をくすぐるには十二分のもだった。

「伝七さんをご存知ですか?」

「あの伝七!? あんた、伝七の知り合いかい?」

男二人は目を丸くする。信じられない事に、二人はただ黙って顔を見合せている。

「ええ、ちよつと…」

「あいつも隅に置けないねえ!？」

「…それで」

辺りを伺うと、幽々子は顔を近づける。予期せぬ事に、二人は初恋の時の少年のように顔を赤らめ身を強張らせる。

「その事について、何か知っている事はありますか？」

小声でささやいた艶のある声。二人は体が固まったまま答える。

「い、いや……」

「俺も、別に……」

「どんな小さなことでもいいわ」

「そうだなあ……あいつが死ぬ前に、バクチで相当勝ったことぐらいか？」

「そんなに勝ったのですか？」

「ああ、五両程の勝ちさ。だが、賭場で別れたから、後はわからねえ……」

そこで幽々子の仮説は確信へと変わった。

（……やっぱりだ。死んだ人は金を持った者かめでたい事があった者。そして合格の後に異変が起きたおたえちゃん。

となると怪しいのは……刺身などを扱う料亭？ここらで一番名高いのは……）

「ありがとうございます」

顔を離すと、軽く礼をする。二人はよほど緊張したらしく、目がうつろになっていた。

「あの……」

頬をかきつつ男が呼び止める。

「わかっています。内緒にしておきましょう。お互いに……」
軽く笑みを浮かべると、ふわりとその場を後にした。

その夜

行灯の明かりのみが優しく辺りを照らす中、そこに四人が座る。
芸者としてそこに紛れ込んだ幽々子は、辺りに気を配りつつ薄暗い
廊下からふすま越しにその一部始終に聞き耳を立てていた。
と同時に、ほんのわずかなふすまの隙間から、その光景を覗き見て
いる。

都合のいい事に今は誰もいない。腕を組んで立ったまま、廊下に立
っただけなのだが、その時ははるかに長く感じていた……

「例の件、誠にお礼つかまつります。勘兵衛様」

「……主も、ついてないのう。まさかこうなるとは……。なあ女将？」
酒を片手に勘兵衛がにやける。初老で少ししわが寄ったその顔は内
に秘めた邪悪さをにじみ出していた……

「全く、そうでございますねえ。ですが、私としても子は可愛いも
のでして……」

勘兵衛の盃に酒を注ぎつつ女将が答える。

「いいお袋さんを持ったなあ？平蔵？古い魚を刺身にした失態を拭
つてくれるとは……」

「はい、ありがとうございます」

三十路程の男が頭を深々と下げる。

「全く、一時はどうなるかと……」

(!?)

ふすまから見えたその顔に幽々子は声をあげそうになるのを必死にこらえる。

その男こそ、診療所の医者である矢島亮作であった……。酒を飲みつつ矢島は続ける。

「これでも大変なのですぞ？よく三人で治まった。これなら無き事に出来る……。証拠は既に全て灰だ……」

「勘兵衛様、矢島様。このことはどうか……」

女将が箱を取り出す。中身は見事な鯛の活け作り。だが、その箱にはさらに底がある……

二重底の中には橙色の明かりを受けて光り輝く小判の山。ゆづに百両は越えているだろう……

「ふふ、まかせておけ。料亭弁天屋の看板は守ってみせるさ」

「この事は私達ならもみ消せる……。金さえ貰えれば黙っていますよ……」

銭を眺め亮作が語る。

「銭さえあれば、な。鯛はいい。食って死んだら笑い話にもなりやあせん……」

勘兵衛が満面の笑みで語る。その顔には悲哀も罪悪感も、ほんの欠

片も感じない……

「ははははは……」

（これで疑問は確信に変わった……）

腕を組んだまま、音も無く幽々子はそこを後にした。

弁天屋の帰り道

幽々子はそこで見かけた。

満月の夜の中、うつすらと見える長い橋。作られて間もない橋の欄干は立派なヒノキの木でこしらえてある。

その欄干に、一人の女がもたれかかる。黒の喪服が月光に照らされ、異様な不気味さを放っている……

「……」

女は手を合わせると、うつむいたまま橋の欄干に手をかける。その瞳にはもはや力は無かった。

この世の全てに絶望し、生気を感じさせないその瞳。女の覚悟は決まっていた。欄干の枠に足をかける。

「……おたえ、私もそこに……」

力無くつぶやくと、川を眺める。死出の旅を照らすかの如く、水面に輝く満月を見つめる……

ヒュウウウ！！

「え!？」

突風と共に、いきなり目の前に桜吹雪が舞い散る！季節外れの桜吹雪はおとぎに向かって吹き荒れる…

『待ちなさい……』

「誰!？」

不意にかけられた声に飛びのき、辺りを見渡すが誰もいない…。橋にはおとぎただ一人。言いようのない不気味さに驚き、思わず足がすくむ。

『まだ五月の夜。川に飛び込むには早いわよ…。凍えてしまう』

「これ以外にどうしろと？おたえは死んだ。弁天屋を訴えようと思つたが、奉行所は取り合つてもくれない……」

どこからともなく聞こえる声に、座り込んだまま叫び返す。

『江戸の外れのさびれた神社。そこにあるほくらに銭を置いて恨みを言つと、恨みを晴らしてくれるそうよ……』

次の日

黄昏の中、ほくらの前にはおとぎがいた。全てが茜色に染まり、心に抱えた悲哀をより一層溢れさせている…。

ジャラン…

四枚の一分銀を置くと、手を合わせておとぎが静かに語りだす。

「……女手一つで手塩にかけた一人娘を、亡くしました……。原因は弁天屋、そこしか考えられません！お願い致します。どうか…恨みを！…」

『その恨み、引き受けた。銭を置いて帰りな。振り向くんじゃあないよ……』

神社にて

「母子の思いか…」

ひょうたんを握りしめ、萃香が一人つぶやく。

「弁天屋の間違った思いに、潰されそうですけどね……」
腕を組んだまま、にとりも続ける。

ろうそく一本のみの薄暗い中、静かに紫が語りだす。

「殺しの目的は、代官の福田勘兵衛。医者^{イサナ}の矢島亮作。弁天屋板前の平蔵と、女将のお八重……」

カタッ…

順に銭を受け取り、闇の中に消えていく……

フッ…

ろうそくを吹き消すと、辺りは闇に包まれた。

矢島診療所にて

銭を重箱にしまうと、本に目を通す。本は医学書。薄明かりの中、人体の解剖図を眺める。

ボキン…ボキン…

矢島の部屋の天井から、鈍い音がかすかに響く。

「…漢方でも蘭学でも、助けられん者はいる。庶民はどうしてそれがわからんのかねえ……」

ザッ！

屋根裏から飛び降り、亮作の背中に立つ！

「じゃああなたの命も諦めな…」

ガッ！

伸びた手が首のうなじを握りしめる！

ボキン！！

「ぐっ！！」

延髄のあたりをへし折られ、声にならないうめき声をあげる……

ドサッ…

畳の上に亮作が倒れるのを見届けると、霧のごとく消え失せた……

代官、勘兵衛の屋敷にて

上質な畳の上で、漆塗りのお盆に乗った銭を数える。銭以外の興味を失ったかのような腐った目に、人の気は無かった……

ヒュウウウ！

「ん？」

バアアン！

「何だ？」

闇夜に響く花火の音。庭から響くその音は勘兵衛の耳にもよく届いた。屋敷にいる使用人達が音を聞きつけ騒ぎだす。

「……どこのだいつだ。こんな夜更けに……」

障子を開けると、庭に面したお縁に向かう。夜空は赤に青に、色とりどりに輝く花火が満開の花を咲かせていた。

「ん？」

燭台を突き出した先には、舟の形をしたからくり細工が庭をひた走り、舟には打ち上げ花火が乗っている。

舟は速く、ほんの数秒で勘兵衛の視界から消えた……

「一体…」

予期せぬ事態に寝巻きのまま勘兵衛はその場に立ち尽くす。その時
！！

縁側と反対方向から構えていたにとりが勘兵衛を狙う！

ヒュン！

にとりが竹筒を勢いよく振ると、からくり蛇が障子を突き破り勘兵衛の首めがけて飛んでいく！

バシツツ！

「ぐえつつつ！！」

巻き付いたからくり蛇は、なおも力を増して首を締め上げていく！
たまらず勘兵衛は縁側から部屋に引き込まれるが、周りには人はいない。皆、花火に気をとられている。

ギ、ギ、ギ、ギ…

蛇を更に引いていく！勘兵衛も必死に蛇をつかむが微動だにしない。

「う…あ…」

助けを求めようとすると、口からはか細い嗚咽が漏れるだけだった。
息苦しさを勘兵衛の顔はほおずきのように真っ赤に染まる！

グイイイ！

最後のとどめを刺すべく、より一層にとりが引く！

グサツツ！

蛇の先端が喉に突き刺さり、蛇が鮮やかな紅に染まる！

ドサッ…

「疫病…か。喰わせる奴は、地獄に落ちな…」

ヒュン！

瞬時に蛇を竹筒にしまうと、庭を一周して手元に戻ってきたからくりの舟を木箱にしまい、闇夜に消えた…

料亭、弁天屋にて
シュッ…シュッ…

薄暗い中、一人の男がただ黙々と包丁を研ぐ。わずかにしか月光が入らず、ろうそく一本のみの板場に平蔵はいた。

白い前掛けをし、静かに包丁を見つめるも、その目には何も見えていない…。包丁の切っ先など彼にはどうでもいいように思っていた…

「…このまま、闇に葬るつもり？」

「誰だ！」

一人しかいないはずの板場に、不意に聞こえる凜とした声。慌てふためき、包丁を手に辺りを見回す。

「知って、いるのか？頼む…秘密にしてくれ。これが明らかにされ

れば弁天屋は……」

スッ……

暗闇の中、一筋の線が平蔵の後ろに切り込まれる。筋は広がり、眼が不気味に浮かぶ空間から、白い洋傘が突き出てくる……

グシュツツ！

「うあつっ！！」

背中から傘が突き刺さり、白い前掛けが赤に染まる！

「……先代に謝ることね。その卑怯な心を！！」

ザシュツツ！

更に力を込めて傘をねじ込むと、平蔵は静かに息絶えた……

「……平蔵？」

かすかに聞こえたような平蔵の声にお八重が気付く。虫の知らせ、とても言うのだろうか？嫌な予感がして板場へと向かう。

「……平蔵？平蔵……！」

照らされた平蔵はうつぶせになって石畳の板場の床に倒れていた。平蔵を抱きかかえると、顔に手を当てる……

「ああ……、何で、平蔵……！平蔵……」

泣きじゃくるお八重に、音もなく影が忍び寄る。闇夜に儚くも輝く

桃色の髪。淡い藍色の着物。白い肌は白粉でなおも艶を増し、その美しさを際立たせる…

パラッ…

静かに扇子を広げる。すでに二人の距離は目と鼻の先、腕一本より短いほどに間を詰めていた。

「……子を守りたいのに違いは無い。それを間違え、報いを受けた…」

「誰!？」

振り向いたお八重は言葉を失った。確かに感じる人に有らざる冷たい気配。その妖気に声も出ず、ただ幽々子を見つめる…

ヒュン!

「ひっ!」

扇子に仕込んだ剃刀が、お八重の喉を切り裂く!!

ドサッ……

平蔵とお八重の血で、板場の床はどす黒い赤に染まる……

パチン…

「…地獄の道案内をしておあげ。今度は道を間違えるんじゃないわよ……」

扇子をたたみ、平蔵に重なるように倒れたお八重にそう告げると、闇に消えた……

第六話・渦中之人（後書き）

第六話、渦中之人 がちゅうのひと いかがでしたでしょうか？

もつと早く投稿したかったのですが…幽々子は書きづらかった…。
大人の女って感じがする幽々子と紫は本当に書きづらいです。まだ
まだ精進が足りませんね。

今回はにとりメインとなります。まだ前口上話してませんからね。
気長にお待ち下さい。

読了ありがとうございます！！

第七話・悪事千里（前書き）

一掛け、二掛け、三掛けて

仕掛けて殺してまた明日

からくり仕掛け握りしめ

騙して殺して巻き上げて

真っ赤な嘘で銭を持つ

闇夜のカラス、川の蛇

今度はあんたが騙される

奇妙奇天烈からくり仕掛け

冥土の土産に拜んでけ

私は必殺仕事人

河城にとりと申します…

第七話・悪事千里

しとしとと雨が降る中、川沿いのあばら家で一人の少女が寝転がったまま自慢のからくり細工を眺める。

雨は朝から全てを濡らし、梅雨の到来を醸し出していた。

外を見ればどこまでも雨が吹き荒んでいる。これでは今日一日家に居た方がいいだろう…。

屋根や壁に打ち付ける雨音が朝からずっと響いていた。

「はあ…」

ため息一つ床に吐き、いろりの炎がかすかに揺れる。十二分に湿気を含み、じめじめとした空気が彼女の気分をさらに重くしていた。

「…ったく、人騒がせな奴だねえ…」

誰に言うでもなくつぶやくと、ちゃぶ台の上の瓦版に手を伸ばす。

瓦版の内容は近頃起こった大事件、大胆不敵にも奉行所に忍び込み金を盗んだ盗賊のことだった。何度も見た瓦版にもう一度視線を向ける。

『大胆な大泥棒、奉行所に忍び込む』

昨日の晩、農民による大がかりな一揆が起こるといった情報を聞いた南町奉行所は役人総出で鎮庄に向かったが一揆はなく、

戻ってみると貯め込んでいた一万両もの金が無くなっていた。奉行所は複数の人間による犯行と見ている』

これがにとりのため息を大きくしていた。からくり屋のにとりは主に縁日でからくり仕掛けを売って生計を立てている。

しかし今は江戸中を役人が、文字通り草の根かき分けて搜索してい

る。その手は縁日が行われる神社にも及び、出店を開くどころではなくなってしまったのだった。

「…うん？」

不意に感じる奇妙な気配。さつと起き上がると玄関の戸を眺める。気の抜けた態度が一気に変わる…。

ガラッ！

「よーにとり！」

「…何だ、あなたでしたか…」

隠し持っていたからくり蛇を引出しにしまふ。現れたのは…

「何だとは何だ。せっかくいい酒持って来たのに…」

鬼の四天王の一角、伊吹萃香であった。これ見よがしに一升ほどのとつくりをにとりの眼前に突きつけると笑みを浮かべる。

彼女もまた盗賊のあおりを受けた一人だった。どこもかしこも役人だらけ。至る所にガサ入れに来るものだから酒好きの萃香にはたまったものではない。

「今日はどうしたんです？」

「なーに、あんと飲み明かそうと思ってな…。どこも役人だらけ。偉そうに役人が片っ端から取り調べしてるの聞いてたら酒がまずくなる。」

どっか静かに酒を飲めそうなところ探してたら、あんたの家を思い出したのさ」

「私の家も川の音や雨音がやかましいと思いますよ？」

「まあ、いいじゃあないか…。たまには…。よ」

苦笑し、半ばあきらめ気味に棚からおちよこを取り出す。今日はどうせどこも出れそうにない。それに鬼の酒盛りを河童が断れるはずもない。

適当につまみを盛り合わせると、その晩は二人で飲み明かした…。

翌日、小野原神社にて

昨日とは打って変わって爽やかな快晴となり、神社には数多くの出店や売り子が参道に溢れかえっていた。

ガサ入れで窮屈な生活のウサ晴らしと言わんばかりに人が闊歩し、景気のいい呼び込みの声が聞こえる。

「一つ三文蜜の味、きんたろうあめはいかがかい？」

参道の真ん中で飴の入った箱を抱えつつ、売り文句を並べ立てる。

「元氣そうだねえ、一つ頼むよ」

「あら、にとりさん。お元氣そうで…」

「そつちも元氣そうだねえ、お菊さん」

きんたろうあめをほおばると笑顔を振りまく。彼女とは縁日で何度も顔を合わせる間柄、商売相手がどちらも子供だから自然と話が合うのだった。

「からくり、売れるといいですね」

「そうだといんだけどね…」

背負った風呂敷の中のからくり細工をポンと叩くと、いつもの場所にゴザを敷く。取り出したのは大小数多くのからくり細工。

ぜんまいを巻き、からくりを動かし始める。こうしておけば程なくして子供たちがやってくる…そう思っていた矢先だった。

「た、大変だー!!」

響き渡る叫び声が賑やかさを一瞬で消し去る!

「ど、どうしたんだ?」

「神社の裏のお堂で、男が二人死んでいる!!」

「何だって!?!」

騒ぎを聞きつけ、にとりも現場に向かう!

お堂へ続く一本道には、すでに多くの人だかりが出来ていた。神社の裏道、普段は誰も近づかないお堂で二人の男が折り重なって死んでいた。

二人ともごろつきのようである。風体が少し荒々しい…

すでに現場には役人が検分に来ていた。

「死人は矢七と助蔵。職についてないごろつきか…。それで、お前が見つけたのか?佐吉?」

「ええ、はぐれちまった息子の勘太を探しにお堂に来たら…」

「…しかし、随分な死に様だな。死因は頭への一撃、お堂にある灯籠に血がこびりついている。おそらくその石段から転げ落ちた

つてとこか……」

「……」
にとりは現場を、腕を組みつつ遠巻きに眺めていた。また縁日が騒ぎそうだな……。ため息混じりにその場を後にし、自分のゴザに帰っていく……。

「……また、荒れそうですね。にとりさん……」
飴売りのお菊が心配そうに声をかける。彼女も不安なのだろう、うつむいたまま飴の入った箱を握りしめている……。

「……まったく、物騒な世の中だよ。かといって、私じゃどうも出来んけどね」
苦笑するとゴザへと帰っていく。からくり細工にはすでに数人の子供たちが来ていた。
誰もが興味津津である。つぶらな瞳でからくり人形を見つめているのが愛らしい。

「げげっ！お前……」
子供たちの中に紛れて、一人の子供が夢中でからくりを見つめていた。後ろでにとりが驚いているのに一切聞こえていない……。

「勘太！お前何してんだ？」
肩を揺さぶり、やっと文二もとりに気が付く。

「何って……からくり見てたけど？」
きょとんとした顔でにとりを見つめる。彼もまたにとりのからくり仕掛けに見せられた一人である。
縁日の度にからくりを眺めに来る、そんな奴であった。無論、父親の佐吉ともにとりとは親交がある。

「父ちゃんが探してたよ？行ってやんな」

「えー。どうせこの人だからじゃわかんないよ」

「……ったく。ほれ、ついてきな」

何気なく手を差し伸べ、参道を歩く。子供たちがからくりを盗むことは無いだろう。

手をつないだまま参道をぶらぶらしていると、程なくして佐吉も見つかった。

「さて、商売といこうかね」

雲一つない青空を眺めると、店に向かって走り出した。

数日後

買い出しに出かけたにとりは江戸の商店にいた。

酒や味噌といったあらかたの調味料を買いそろえると、道には黒山の人ばかり。

誰もかれもが大騒ぎしていた。

「号外―！号外―！ついに盗賊が見つかった！奉行所に盗みに入っただのはこの間死んだ矢七と助蔵だ！証拠は奉行所に落ちていた根付だ！」

*根付・財布などの入れ物の留め具の事

「何だつて！それじゃあ何で死んだんだ？」

「金を分ける時の内輪もめらしい。さあ号外――号外――！」

にとりも人だかりに入り、瓦版を手にする。だがにとりには納得が出来なかった。矢七と助蔵二人で一万両もの金を運び出せるものだろうか？

たつた二人で奉行所に盗みに入るなど考えにくいものだった。

「それで、盗まれた金は見つかったのかい？」

人ごみの中、一人の男が売り子に問う。

「それが……あらゆる所を探したがどこにも……。どっかに隠したんじやねえかと噂されている」

「じゃあ見つけりゃ大金持ちだ！」

その言葉にざわめきが更に激しくなる。だがにとりはどうも納得できないまま人ごみから抜け出ると、誰に言つてもなくつぶやく。

「……あの方なら面識があるかもね」

その晩、小料理屋「ふじ」にて

「……で、私に調べてくれと？」

酒を片手に話し始める。相変わらずの酒豪だ。飲んでいるのに顔色は一切変わらず平然としている。

「ええ。あの二人が盗賊じゃ奇妙だと思うんです。そう思いませんか？萃香さん？」

「ま、あたしも奇妙と思ってたさ。わかった、やってみよう。飲み仲間の文二と与一なら知ってると思う」

「ありがとうございます」

「なーに、そう堅苦しくしなさんなつて。これぐらい構やしないさ」

その二日後、江戸のはずれの古びた神社にて
ろうそく一本の薄暗い中、萃香が話し始める。中には幽々子、紫、
にとりといった仕事人達が勢ぞろいしていた。

「調べてわかったが、矢七と助蔵はただのごろつき。確かに悪だが
大それたことをやってのける奴ではない。
それで、奉行所に盗みが入った晩の二人の行動を洗ってみた」

「随分早かったわね」

「飲み仲間が知っていてな。紫、それでその晩二人に会った奴がい
る」

「誰？」

「飴売りのお菊さ」

「何ですって!？」

にとりが驚き、立ち上がる。思いもよらない相手に目を丸くし、立ったまま固まっていた。

「誰? その子?」

幽々子が扇子片手に続ける。

「私の知り合いです。それで、萃香さん?」

「あー、といつてもお菊はからまれたんだ。小料理屋にいたら無理矢理、お酌をするよう言われてな」

「じゃあ結局手がかりなしね…」

残念そうに幽々子が肩を落とす。

「いや、そのお菊…なんか妙なんだ。あいつ、なんか行動がおかしい。昨日一日尾行してみたが、たまに周りをうかがったりしている。それに…」

「それに?」

「人のいないところだと気配が少ないんだ。物音なく家に入り込む足音もなく…」

「それってもしか…お菊さんが?」

にとりが驚いたまま続ける。

「可能性は十分ありうる。だが今回は厄介そうだ。時折見せる身のこなし。おそらくあいつ…くの一だと思う」

「なるほど…なら、合点がいくわね」

紫がほほ笑み、傘を握りしめる。

「それで紫と幽々子はお菊の過去を調べてくれないか？奴は昔、上方（京都方面）にいたらしい。そこに向かって欲しい。私はにとりと江戸でお菊を調べる」

「承知。引き受けたわ」

スキマを開け、無数の眼の中に紫が飛び込む。

「じゃあよろしく」

のんきに手を振ると幽々子もスキマに消えていった…

翌日

早速、にとりと萃香は探りを開始した。にとりがお菊を尾行し、萃香も霧散して彼女を追っていた。お菊は気付かぬまま、とある店に入り込む。

行先はというと一軒の鍛冶屋であった。一定のリズムで響く金属音が外にも聞こえてくる。

「にとり…聞こえるか？」

霧散したまま萃香が小声で話しかける。

「萃香さん？」

「私はこのまま屋根裏から忍び込む。あんたは床下。頼んだよ」

「合点承知」

カーン、カーン…

響き渡る金属音がやがて止まり、甚平を着た一人の職人が汗を拭い
つつお菊を出迎える。年はお菊と同じくらいだろうか。
お菊は入るなり彼の近くに腰を下ろす。

「例の件、どう？京平？」

「お菊か…。あまり進んでねえ。人目を忍んで少しづつやってるか
らよ。何せ量がな」

「ま、一万両だからねえ…」

お菊がしたり顔で満面の笑みを浮かべる。

「馬借の修二と経師屋の法仙は？」

【馬借とは馬を使う運送業者のこと。経師屋とは主にふすまや障子の
張り替え、屏風を作る職人の事】

「順調そのもの。修二は無事に関所を越えだし、経師屋にも役人は
来てない」

「流石お菊だ、頭が切れる…」

「なあに、大したことじゃないさ…これであたしたちも大金持ち。」

そんなとき頼むよ？“おまえさん”」

「なに、任しときな。上手くいったら夫婦になろう」
京平は笑みを浮かべてお菊の頬に口づけをかわす。

「それで、出来てんのかい？」

「ああ、持ってきたな」

床下から取り出した風呂敷包みを手に取ると、お菊も笑みを浮かべたまま鍛冶屋を後にした。お菊と広く間を取って二人もお菊を追う。

お菊がついた先は経師屋の法仙の家だった。
二人も注意深く忍び込むと、お菊の会話に耳を凝らす。

「順調かい？」

「ああ、何とかな。それで、持って来たのかい？」

「ええ、ここに…」

お菊が風呂敷包みを広げる。現れたのは薄く伸ばされた金だった！

（なるほど…江戸で金を隠すのは危険と見て、遠くに金を送ろうと…。
だから関所を越えるために鍛冶屋が金を伸ばし、経師屋が作ったふすまや屏風の間に挟み込んでいたのか…）

屋根裏で板の隙間から一部始終を見ていた萃香が一人うなづく。

「これで一万両は我らのもの。しかしお菊、よくあんな身代わり用意したな？俺は聞いてなかったぜ？」

「ああ…あいつらか。奉行所に入る前に気付けに飯食ってたら、向こうからからんできたのさ」

「それで奴らを？」

「迷惑と思つたが、面倒を起こしたくない。それで酌してやったら、珍しい虎の根付をしていてな」

「お酌するふりしてスリ取ったつてのか？」

「そして現場に落とし、二人が死ねば…」

「文字通り“死人に口なし”ってことか…」

ガサツ！！

「誰だ！」

(！？)

不意に響いた物音、とたんに緊張感が走る。その場に居合わせた招かれざる客、それは勘太だった！勘太は必死に走る！

「くっ…追うよ！」

お菊と法仙が追いかける！勘太は川へ向かって走り抜ける！だが大人と子供、しかも忍とあつては勝ち目がない。徐々に距離を詰めら

れていく…

にとりと萃香も追いかけるが、床下と屋根裏から飛び出すのに時間がかかり二人を止められない！

「うああああ！」

恐怖でわめきつつ、勘太は川へと飛び込む！

シュツ！

法仙が懷から小刀を取り出し投げつける！刀は一直線に飛んで行き、勘太の胸を貫いた！

ザパーン！

水しぶきが辺りに飛び散る！

「…行くぜ。確かに心臓を撃ち抜いた」

法仙とお菊は足早に消えていった…。

「勘太！」

一目散に川に向かうと、そのまま川に飛び込む！

橋の下に引つ掛かっていた勘太を拾い上げるが、すでに絶望的だった。小刀は深々と心臓に刺さり川を紅く染めている…。

「にとり…ねえちゃ…俺」

「しゃべるな！しっかりしろ！」

「大変…だ。お菊…が、お堂で、人を…」

「わかつてる！」

「ねえちゃん…恨みを…」

懷から錢の入った巾着を取り出す。血染めの巾着を握りしめ、震える手でにとりへと渡すが、力が抜けていく…。

にとりがしつかりと抱きしめるが、その体にもはや温かみは無かった…

「勘太…ちくしょう！」

巾着袋を握りしめ、勘太を強く抱きしめていた…。

「にとり…」

「……萃香さん。私、なんでもっと早く気付けなかったんでしょうかね？あいつが忍だったことに……」

「……あんたの責任じゃあないさ。それより早く、その子を川から上げてやんな。いつまでも冷たい水の中じゃ浮かばれないよ」

「……はい」

力なくうなずくと、川沿いの土手に寝かしつけた…。

その夜、江戸のはずれの神社にて
ジャラン！

巾着袋を広げ、紫が小錢を木箱の上に並べる。

「…殺しの的は、馬借の修二。経師屋の法仙。鍛冶屋の京平。飴売

り娘のお菊……」

「……個人的な話になりますが、お菊は私にやらしてもらえませんか？」

にとりが開口一番にそう告げる。

「……今まで以上に手ごわい相手よ？」

扇子片手に幽々子が告げる。

「どういうことだい？」

腕を組んだまま萃香が聞き返す。

「……お菊は、いえ彼らは皆、伊賀の抜け忍なのよ……」
ため息混じりに紫が告げる。

「その中でもお菊は指折りの腕を持つ。確実に二人一組で仕留めた方がいいわ」

「いや、奴らも今日のことですぐ江戸を出たがってるはずだ。二人一組では時間がかかる。今日のうちに一人につき一人でやる方がいい……」

萃香が紫に助言する。紫は腕を組み、二、三秒考えると、目を見開き切り出した。

「……わかった。でも、気を付けて。相手は忍。どんな手で来るかわからないわ」

「……はい」

銭を手に取り、にとりが出ていく。それを皮切りに全員が銭を取っていく……。

フッ…

紫がロウソクを吹き消し、神社は闇に包まれた……

深夜、経師屋法仙の家にて

「ほれ、今回の分だ…」

「へへ、こりやどうも…」

玄関先で大きな風呂敷包みを馬に積ませ、にやけ面で二人が小声で話す。

「大した稼ぎね。なんせ金入りのふすまなんだから…」

透き通った女の声が家の奥から響き渡る。そんな馬鹿な、二人は顔を見合わせると懷から刀を取り出す。

静かに家に行くと、いろりの前には幽々子が立っていた。驚く二人に対し幽々子は平然とした顔で二人を見つめる。

「……てめえ、誰だ？」

馬借の修二が刀を抜きつつ凄む。

「…あの世への橋掛け人、ってどこかしら？」

扇子をゆつくりと広げる。二人は徐々に間合いを詰めていく。

薄暗く月光しか入らない中、刀と扇子に仕込んだ剃刀が鈍い光を放っている…

「でやつ！」

修二が横なぎの一閃打ち込む！だが幽々子はひらりとかわすと、のど元を扇子でカッ切る！！

ザクッ！！

「がふっ……」

修二はそのまま前のめりに倒れ、畳が噴き出した血で真っ赤に染まる……。だが幽々子の後ろには既に法仙が構えている！！

「獲った！」

刀を握りしめて真っ直ぐに突いてくる！

その時だった……。法仙の後ろの障子に裂け目が走ると、空間が広がる。

無数の眼が広がる中、白い洋傘が法仙の背中に狙いを定めると、傘は法仙の心臓を貫く！！

グシュッッ！！

「うぐっ……」

「壁に耳あり、障子に目あり」いくらやっても隠し通せる嘘は無いのよ……。悪事であれば、なおさら……」

ドサッッ……

法仙が倒れたのを確認すると、二人はスキマの中に消えていった……。

同じく深夜、鍛冶屋京平の家にて
カーン、カーン…

甲高い金属音が小さく響く中、黙々と京平は小判を薄く伸ばしていた。
た。

「…ふう」

汗をぬぐうと、一人外に出る。行先は井戸だった。ずっと作業をしていて喉が渴いていた京平は水をくみ上げると、ひしゃくで水をすくう。

パキン…パキン…

闇夜に響く骨のきしむ音。夜風に紛れていた萃香の体が一点に集まる！

「！？」ひしゃくの水を口に含もうとして、余りのことに息が止まる。

水面に映っていたのは小麦色に輝く長い髪、そしてなにより誇らしげにそびえる二本の角。

初めて目の当たりにする存在に気が動転するも、忍ばせている刀をゆっくりと手に取る。

ヒュン！

京平が振り向きざまにこめかみを狙った一閃を払う！

キーン！

だが萃香は頭を下げて角で刀を受けると一気に間合いを詰める！

ガッ！

力強く首を締めあげる！目にする鬼に驚き、京平は刀を落としてい

た…

「…地獄で釜でも作ってな。出来たらあんたも入れてやるよ」

ゴキン！

鈍い音が響き、首がねじ曲がって京平は井戸のそばに倒れた…

日本橋にて

あらゆる交通の要所として知られる日本橋。その真ん中にお菊はいた。た。

馬借の修二が江戸を出る際は確認のためお菊も起きている。しかしいつまでたっても修二は来ない…

「…まったく、修二はどうしちゃったんだい？」

呆れた顔でお菊が川を眺める。梅雨でなみなみと貯まった水に月が輝いていた…。

「…待つても来ないさ。あんたが行かなけりゃ、会えない…」

日本橋の中央でにとりが答える。

手にはからくり蛇の入った竹筒と、黒塗りの木箱を持っている…。

突然現れたにとりにお菊はただ驚き、身構える。

「…にとり、あんたまさか…」

「…既に仲間は今頃、閻魔様の裁きを受けてるだろうよ…」

「…そうかい、骨のない奴らねえ…」

静かにそう答えると、懷から武器を取り出す。

月光を受けて鈍く鉄が黒光りする…。取り出したのは鎖鎌。五メートルほどの鎖の先には空豆ほどの分銅がある…。

「…それで、二人を」

「…そうさ、あつけないもんだったよ。一撃で頭が碎けた。あんたもじきに、そうなるさ…」

ヒュン、ヒュン…

鎖鎌が回っていく。こんな物に当たれば妖怪といえど頭蓋骨が碎けてもおかしく無い。二人の距離は約三メートル、どちらも射程の中に入っていた。

息を殺し、相手の出方を待つ。梅雨特有の湿り気を帯びた風がほほをなで、汗が自然と流れ落ちる…。

次の瞬間！

ヒュン！！

鎖分銅がにとりの左目めがけて飛んでいく！

にとりはこれを見切り、右に避ける！

（勝った！）

お菊はそう確信した。鎖鎌を紙一重で避けたところで、体にからみつかせればお菊が圧倒的優位になる。だが…

「え！？」

ザパーン…

にとりは思いつきり右へ飛び、鎖鎌が届かない川に飛び込んだ！

「くっ…」

忍といえど川に隠れた者を探すのは至難の業、とても見つけれられたものではない。鎖を回しつつ川に目を凝らすが一向ににとりは見つからない…。

にとりが持っていた木箱が漂っているのがなんとか見えるが、本人はどこにいるのか全く分からなかった…

その時！

「お菊！」

にとりがそう叫ぶと、竹筒を振る！飛び出したからくり蛇がお菊めがけて飛んでいく！

「！？」

お菊も鎖鎌を投げつけようとした、その時！

ドオン！

木箱が爆発し、お菊の眼前に一瞬の壁を作った！

水の壁は景色をゆがめ、にとりの正確な位置がわからなくなる…

バシッ！！

「かはっ…」

からくり蛇がお菊の首を締めあげる！お菊も鎖鎌を投げ返したいが、にとりは既に川の中にいる。狙いなど付けられないのは明らかだった…

「この…っ」

鎌でからくり蛇を切ろうとするが、蛇につながる紐には針金が編み込まれていた。鎌で押しても引いても、紐には一つも切れ目が入らない……

ギ、ギ、ギ、ギ…

さらに蛇が巻きつき、ついに…

ザシュッ!!

「ぎゃあっ!」

鋭利にとがった蛇の先端がお菊の首に突き刺さった!

ドサッ…

倒れるお菊を眺めると、蛇をしまい川を泳いで行った…

第七話・悪事千里（後書き）

第七話・悪事千里　いかがでしたか？

元ネタはかの“六億円強盗事件”です。「背後に大きな組織があるのでは？」という疑惑からこの話を作りました。

今回は一味変えて殺しのシーンにアクションを加えてみました。とある方から「戦闘シーンを入れてみては？」とアドバイスを受けてこんな形になりました。

にとりメインの話なんで鎖鎌対からくり蛇といった奇妙な戦いとなりました。楽しんで頂ければ幸いです。

また、今回はにとりと萃香をからめてみました。鬼と河童は相性がいいかと思いましたが…。

また情報収集の為に文もしくは桜を出そうかと思いましたが、話がこじれそうなので止めました。

次回は…誰がメインかは伏せておきます。私も忙しくて一カ月以上更新できないと思われますので…

気長にお待ちください。月見草からでした。

第八話・奇々怪々（前書き）

この世は一つの 混ざりもの

あの世のように 分けてはくれぬ

善人さえも 苦しんで

悪人だろうと 銭あれば

極楽の日々 過ごしてる…

地獄の沙汰も 金次第？

泣くのは弱いものばかり

涙を拭いて いらっしやい…

ねじれた善と 悪の道

きつちり境を つけようか？

私は必殺仕事人

八雲紫と申します…

第八話・奇々怪々

まだ梅雨の気配が残る、蒸し暑い夜のことだった。雨が屋根を打ち立てる音が響く中、一軒の飲み屋では雨に負けないほどの声が響いていた。

「怪談!？」

相も変わらず酒を呑み、真っ赤になった顔で萃香が答える。
蒸し暑く胸元をほだけ、白いサラシが覗いているが一切気にしていない。当の萃香はおちょこ片手に呆れた顔をしている。

「ええ…。最近有名ですよ…」

怪談話を語る二人の男、飲み仲間の文二と与一は真顔で話す。
よほど恐ろしかったのだろう、眉唾物の話だが彼らは本気だった。
萃香と同じく酒を飲んでいるが、酒があまり回っていない…。

「どんな話だい？」

半笑いで萃香がどぶろくに口をつける。白く濁った酒を眺めつつ、面白そうだと内心萃香は思っていた。

いい酒の肴になりそうだ…。彼らの話に耳を傾けつつ、おちょこに酒を注いでいく。

「それは…一昨日の晩のことでした。酒飲んで二人で帰っていたら、うっかりその“化け物”がいる廃寺に入っちゃったんです」

「それで…そのまま入っていったら、紫色の番傘が一つ置いてあったんです。その次の瞬間！」

「それで？」

「見たところ壊れていないようだし、持って帰ろうと近づいたら、突然バツと開いて！」

「その傘には…大きな一つ目と長い舌が!!」

「そうかい…」

恐ろしい事を思い出して、話が進むにつれて語調が上がっていく二人とは裏腹に萃香は終始満面の笑みだった。

「姐さん？」

一向に怖がる気配のない萃香を前に、二人は首をかしげる。

萃香は酒をぐいっと一飲みすると、笑顔で叫んだ。

「よし、今夜その廃寺に行ってみよう！」

「ええ!？」

「冗談じゃないですよ! あっしらだけじゃなく、大勢の奴が見たんですぜ!？」

「だからこそ面白いんじゃないかい？」

「悪い事はいいやせん…止めときましよう?」

その後何回か誘ってみるも、二人は一向に乗り気ではない…。ついに諦め、『男のくせに何ビビってんだい!』の一言を残して萃香は廃寺へと向かった。

「成程：これが噂の廃寺かい」

ひょうたん片手に萃香がつぶやく。手入れされずに何年もたち、好き勝手に伸び放題の草木が、提灯と月光に照らされ一層気味が悪い…

「で、何で私も連れてこられてんの？」

呆れた顔で紫がつぶやく。すでにまぶたは重く、時折あくびをしていた。妖怪とはいえ真夜中に連れてこられちゃ無理もない。

すでに寝る間際だったのか、薄っぺらい紫色の寝巻きのまま、傘を持っている。

「こういうのは連れがいるから面白いのさ。大体夜は妖怪の時間だろ？」

「私は例外よ…。まあいいわ。さつさと見て帰りましょう」

当の廃寺は予想通り荒れ果てていた。傾いた階段や穴があいた障子、苔が付いた入口の門が人の手から離れて何年もたつことを現していた。

時刻は草木も眠る丑三つ時「午前2時過ぎ」。

化け物が出やすい絶好の条件を揃え、ずんずんとその廃寺へと近づいていく。雨はもう止んだが、雨で濡れた寺は一層気味悪く感じる…。

「ん？」

話の通り、寺の入口、狛犬の辺りに置かれた紫色の傘。萃香は恐れもせず傘を手に取りうつとしゃがみこむ。その瞬間！

「ばあつー！」

一つの声と共に、傘がひとりでに開く！傘には一つ目と長い舌……。だが萃香は驚くこともなくケラケラと笑うばかりだった。紫はただずっと仏頂面でその傘を眺める。

「ほう…あんたがからかさお化けかい？話には聞いたが見たのは初めてだ」

笑いながら萃香はひょうたんの酒に口をつける。

「あんた達…誰だい？」

見た目は何てことない小娘と女。だが全く恐れない二人に驚かすはずのからかさお化けが驚かされる…。

それにうつすらと感じる妖気。その存在に疑問が浮かぶ。

「わたしやあ伊吹萃香。ただの酒飲みさ。こっちは八雲紫。そろそろ顔見せたらどうだい？」

ついに観念し、本来の姿を現す。肩ほどに伸びた水色の髪、赤い鼻緒の下駄。

何より特徴的なその眼が二人を眺める。右目は水色だが左目は真紅に染まっている…。

「…多々良小傘と言う。あんたら、もしかや妖怪？」

「はは、そんなもんさ。ここで何を？」

「……あんたら、秘密を守れるかい？」

「ああ、口は堅い方さ。無論、紫もな」

「…ついてきてくれ」

それだけ言うと、小傘は廃寺へと歩き出す。

カラン、コロン…

下駄の乾いた音が闇夜に響く。その後を二人も追っていく。

ガラッ！

ところどころ穴があき、風雨で黄ばんだ障子を開けると、一人の女が横たわっていた。

そこは異様な光景だった。寝ている布団は湿り気を持ち、辺りの空気が長雨が降り続いたかのように水分を含んでいる。

その女の長い黒髪は艶があるが、その髪もたつぷりと水分を含み、まるで今風呂から上がってきたようである。

「…その女、もしや雨女？」

辺りを眺めた後、紫がつぶやく。雨女とは妖怪の一種、文字通り雨を降らす力を持つ妖怪である。

「…誰だい？その人たち？」

雨女が、起き上がると小さく話しかける。眼は少し元気がない。

着ている薄い水色の着物が、首筋の白い肌をより一層白く見せている。着物も少し濡れていて、下に来ている肌襦袢がうつすらと見え
ている…

「妖怪の一人らしい。伊吹萃香さんと八雲紫さんだ」

「なんだって!？」

雨女が飛び起きると、目を丸くする。

「知ってんのかい?こいつら?」

「バ、馬鹿!伊吹萃香さんと言えば、鬼の四天王の一角じゃあないか!それに八雲紫とくれば、境界を操る大妖怪!お前、世間知らずにも程があるだろ!？」

一気に目の覚めた雨女がまくしたてる。当の小傘は口を開いたまま、ただその話を聞いていた。

「ほう、私達を知ってるとはねえ…」

そう言くと、人から本来の姿に戻る。黒髪は段々、本来の橙と金色の髪に戻り、萃香の頭には二本の角が伸びていく…

「し、失礼いたしました…。まさか萃香さんと紫さんとはいざ知らず…」

「いいんだいいんだ、まあ楽にしなよ」

あわてて正座し、頭を下げる二人を萃香が手で制する。

「…で、小傘?あんたここで雨女と何してんだい?」

そこの床に腰掛け、あぐらをかくと萃香が問い始める。

「…実は、この雨女の雨女こりめが陰陽師に叩きのめされて…」

「陰陽師に?雨姫、あなた何かやらかした?」

紫も床に座ると、腕を組んだまま耳を傾ける。

「いえ何も…。いつも通り雨降らしてたら『これ以上ジメジメさせるんじゃあねえ！』と問答無用でお札を投げられて…」

「呆れた野郎だな…」

萃香がつぶやき、下唇を噛む。妖怪の一人として他人事ではないその話に憤りを感じつつ、なおも小傘が話を続ける。

「それで、偶然見つけた私がこの廃寺にかくまった訳で…」

「成程、雨女とからかさお化けじゃあ、まさに水と魚みたいなものだからね」

「じゃあ怪談話は人払いのために？」

「そういうことです。それで…」

「わかってるわ。雨姫の傷が治るまで、かくまってなさい」

「ありがとうございます！！」

「さ、帰るかね」

それだけ言うと、二人は立ち上がりスキマの中に消えていった。

翌日

昨日と同じく降り続く長雨が町を濡らす中、朱色の番傘片手に一人

の女が歩いていった。深紫の生地、藤をあしらった着物が何とも目に残る。

「ここね…。雨姫が言ってた陰陽師、妙伝の屋敷は」

傘を傾け、その屋敷を見つめる。松の植木で囲まれた中に、真新しい屋敷があった。作ったばかりでしっくりいはいは真つ白で、植木もきちんと剪定されている…。

（…ここ数年で妙伝の噂は一気に上がっていった。だが雨姫の話を聞く限り、ろくな奴とは思えない。ちょっとその妙伝とやらを見定めてみますかね…）

鼻歌を歌いつつ、紫が屋敷の門に近づく。さてどんな口実で妙伝に会おうか…。そんなことを考えていた矢先だった。

（ん？）

その時目に映った一人の老人。髪はすでに真つ白だが、きちんと結っており、手には漆で塗られた箱を抱えている。

着物も金箔をあしらった上着を羽織っている。その老人はどうやら医者のようなのだ。

（医者が陰陽師の所に？急患…ではないようね。何か恐れを抱いた顔をしているし、辺りを見回している…）

違和感を感じた紫は立ち止まると、厠へと向かう。人がいないことを確認すると、手早くスキマを開いてその中に飛び込んだ…

スッ…

屋敷の一角、妙伝がいる部屋の屋根裏にスキマを開くと、足音もなくそこに降り立つ。

作られて間もない屋根裏には檜の木の匂いが漂い、クモの巣一つ見当たらない。紫はしゃがみこむと、板を一枚静かに開ける…。

中にいたのは二人の男。一人は先ほどの老人、もう一人は特徴的な恰好をしている。

烏帽子をかぶり、顔には白い白粉を塗っている。年は三十ほどだろうか、その陰陽師、妙伝が話し始める。

「して、涼庵殿。今日の御用は？」

「はい、実は近頃噂の“からかさお化け”のことで頼みにきました」

「退治せいと申すか？」

「いえ、生け捕りにしてもらいたいです」

「ほう…何故に？」

「実は私…もう長くないのです。私も医者。自分の体の不調はよくわかります。それで、どうも私は腎の臓が悪いようで…」

「成程…だから人より力のある妖怪の肝を頂こうと…」

「ええ…。今の医学では治らぬことは明白、ならばどんな手にでも

出ましよう。これは私からの気持ち。お願い致します。どうか私めに…」

そう言うと、箱から五百両もの大金を取り出す。まばゆいばかりの金の輝きに、妙伝の顔が自然とほころぶ。

「ふふふ…任しておけ。必ずやその肝、お目に掛けて見せましよう…」

一部始終を見終わると、紫は音もなくスキマに消えた…

それから一週間後

江戸はいつもと変わらぬ日々が過ぎていた。そして“からかさお化け”の怪談話も、依然変わりなく流れていた。

当初、萃香は『小傘と雨姫を救うべきだ』と言ったが、妖怪と人の喧嘩は今に始まった話ではない。

結局誰も手を貸さなかったが、小傘の噂は消えることはなく、心配せずとも大丈夫だろうと次第に仕事人達の間でも小傘のことは話題に出なくなっていた。

江戸には依然、どんよりとした雲が漂っている。その雲の下、引き潮で姿を現した干潟に、一人の少女がいた。

肩甲骨ほどに伸びた髪を後ろで束ね、背中には自作の荷袋。熊手片手に貝を取る河城にとりがそこにいた…。

手には桶を持ち、先ほどからアサリを捕っている。辺りはアシが生

え、見通しの悪い中、アサリを捕り服は泥で汚れている。

今日は一日中曇天の空になりそうだ…。空を眺めつつそんな事を考えていた時だった！

『おーい…』

「！？」

不意に聞こえる、女の声。辺りを見渡すが誰もいない。

萃香さんか？気配をかすかに感じるが、萃香のそれではない。熊手を構えると、なおも辺りを探す…。

『聞こえたようね…。そのままです。話がある』

「…誰だい？私は得体のしれない奴と話をする気は無いよ？」

『得体が知れないのはあんたも同じだろ？仕事人の一人、“からくり屋のにとり”さん？』

「な！？」

誰もが知るはずもない裏の顔、その名を呼ばれて目を見開く。どこからその名が…。全身に震えが駆け巡る。

ザパツ…ザパツ…

沖の方からかすかに響く水の音。次第に、辺りに霧がかかっていく。間違いなく妖怪…。そう感じたにとりは熊手を構えたまま、次第に沖から近づく影に目を凝らす…

「誰だ？」

現れた少女をにらみつけたまま、にとりが問う。現れたのは白い着物の女だった。

だが、甚平のような形の着物で、袖は半袖で袴も短く膝よりやや高い。そして手には柄杓を持っている…

「村紗水蜜と言う」

「その柄杓…もしや舟幽霊かい？」

「ご名答。もしやしくても舟幽霊さ」

「なんで私が仕事人と知っている？海で死に、海に縛られているお前が、知るはずがない…」

「あんた、日本橋で何かしただろ？ドン、と大きい音が聞こえて、見てみたらあんたがいた…」

「でたらめ言うな！海から日本橋が…」

「本当に見たんだよ。これで…」

そういい、懷から一つの筒を取り出す。その筒は金細工で装飾されていた。金でツタや花をあしらったそれは、一目で高価と分かる代物だった。

これみよがしに村紗が引き延ばすと、それは立派な望遠鏡だった…

「そんなもんどこで…」

「昔、南蛮船を沈めた時に手に入れたのさ。これで一部始終を見てたって訳」

“これで全てに合点がいく？” そんな問いをするかのような顔で村紗が伝える。

一方のにとりはバツが悪そうな顔をしていた…。この女、まさか見ていたとは。

いつそ始末するか？でも何で姿を現して、見ていたことを伝えた？様々な思いが交錯する中、村紗が話を切り出した。

「それで…にとり、あんたに“仕事”がある」

「何？」

「私は別に仕事人の事を公にするつもりはないさ。あんたたちを敵に回す気もない」

「それに仕事人の噂は漁師たちの世間話で聞けるよ。“弱い者の味方”とね。だから言う気はない」

「…そうかい」

一応、話のつじつまは合いそうだが…。熊手を直すと、再度辺りに人がいないか確認し、話に耳を傾ける。

村紗は数秒うつむくと、視線をとりと合わせ、一言はつきりと言った。

「…小傘を、救ってほしい…」

「何だと？なぜお前が小傘を知っている？」

「雨姫は私と知り合いだね。風の噂で雨姫が小傘っていつからかさお化けにかくまわれていると知ったのさ」

「小傘は陰陽師を退けたんじゃないのか？」

「ああ、昨日までは…ね」
齒を噛みしめつつ、村紗がその日のあらましを語りだした…

それは昨日の晩のこと

一昨日、陰陽師の妙伝が弟子の香春こうはると空慈くうじと共にやってきたが、小傘と雨姫に返り討ちにされた。

だから、三人はもう来ることは無いと小傘達は油断していた。

だが、妙伝はあきらめてはいなかった。小傘が川に向かい廃寺を出て行った隙を見て、三人は雨姫を打ちのめした！

「ただいまー」

そこに、何も知らない小傘が魚の入ったびくを持ってやってきた。だが、寺にいたのは…

「雨姫！！」

お札を張られて力を失い、香春に刀を首筋に突きたてられていた雨姫だった！

「小傘…早く逃げな。狙いはあんだだよ…」

「余計な口をきくな！」

妙伝は叫ぶと、その札に力を込める！

「ああうつ!!」

寺に響く悲痛な叫び。一気に小傘の顔から血の気が引く…

「この外道…！あんた何すんだい!!」

「外道？妖怪風情に言われたくないねえ…。さ、取引だ。大人しく降伏して私の術で縛られてしまえば、その雨女の命は助けてやろう…」

「約束…だな？」

「ああ…」

「止める…小傘…」

雨姫が必死に叫ぼうとするが、声は出ず小傘には届かない…

「わかった…」

小傘はついに観念し、本体である傘を放り投げた…。

「ふふふ…聞き分けのいい子だ…」

妙伝はにやけると、術式の書かれた巻物を取り出し、呪文を唱える。するとその巻物は小傘に巻きついた！

「うつ、ああ…」

小傘は二言、三言つめき声を上げると、気を失った…。

「小傘！」

「安心せい。すぐに会えるさ…やれ！香春！」

ザシュツッ!!

「あぐつつ!」

脇腹に小刀が突き刺さり、薄水色の着物が鮮血に染まる…。鮮やかなその紅は一気に広がっていった…

「約束…した、でしょ?」

「“約束”だと?ふははは!」

「何を言うかと思いきや…」

雨姫の眼前で香春と空慈が下卑た笑い声を上げる…

「約束というのは、あくまで人と人との話。人に有らざる者との約束など、意味がないに等しいのさ…」

にやけた顔で妙伝が告げる。その冷酷さはまさに獣、人らしい温かみは微塵もなかった…

「こが、さ…」

ドサツッ…

雨姫はその場に倒れると、その場は水で濡れた…。後には着物だけが残り、体は影も形もなくなっていた…

ガサッ!

「上手くいったようすな?」

茂みの中から、涼庵が出てきた。彼もまた、この時を待っていたのだろう…

「まあ待たれよ…。今はまだ早い。巻物で力を弱めたと見え妖怪…。明日の晩まで待って、力をもっと弱めなくてはならない…」

「はは…楽しみはそう簡単に手に入らんものですな…」

「私は、ただそれを遠くで見ることしか出来なかった。この恨みと、雨姫の願いを、友として私は叶えてやりたい！」

ジャラ…

村紗はそついい、金を出す。手には八両もの小判…

「小傘を救い、雨姫の恨みを晴らしてやってくれ！」

「…わかった。その恨み、確かに引き受けた…。あとは任せな…」

「ありがとう！恩に着る…」

深く頭を下げた村紗の手から、金を取ると、すぐに神社へと歩き出した…

その夜、神社にて

「無理やり体を奪い去ろうとは…ね」
幽々子が扇子片手につぶやく。

「…陰陽師の化けの皮被った鬼退治ってどこか」
右手の拳を握りしめ、萃香が答える…

「殺しの的は、陰陽師の妙伝、香春、空慈。医者の涼庵…」
村紗からの銭を広げながら、紫が淡々と語る。

ジャラ…

一人一人、小判を取っていく…

「化け物ってのは…何なんでしょうかね？」
にとりがふと、紫に問う。

「さあね。人の解釈は如何様になる。でも奴らは、間違いなく外
道よ…」

それだけつぶやくと、銭を取る。

フツ…

紫がろうそくを吹き消すと、神社は闇に包まれた…

その夜、妙伝の屋敷にて
檜の木が格子状に組まれ、石造りの壁で囲われた牢屋の中に、小傘
は横たわっていた。

その牢の前では香春と空慈がキセルで煙草をふかしつつ、眠そうに
牢の番をしている…

「…ふあああ」

「やっと今日で全てにカタがつくな…」

「ああ、こいつの肝は涼庵に、そして他の部分は我らが頂けば…」

「特にこの色違いの目、相当な力がありそうだぜ…。飲めば妙伝を
超えられるかもな？」

そついい、小傘の元へ香春が駆け寄る。

だが、その言葉はもはやただの戯言に過ぎない…。塵芥が風と共に
集まると、一つの形を作り出す。鬼の四天王にふさわしい二本の角…

ボキン…ボキン…

鈍い音が牢屋に響き、二人は萃香に気づいた！

「お前…」

香春が振り向き、叫び声をあげようとした瞬間！

ガッ！

力強く喉をつかまれ、香春の顔が真っ赤に染まる！

ゴキン！

萃香が首をへし折り、香春の眼は一瞬で虚ろになる…

ドサツツ…

香春は力なくその場に倒れた…。だが！

「う、動くな…！」

萃香の後ろで空慈が叫ぶ！

「お、俺の持っている札に力を込めれば、小傘とかいう奴の巻物が反応する！小傘を殺されなくなったら、そ、そこを動くんじゃねえー！」

震える声で空慈が叫ぶ。手には確かにお札が一枚…

萃香と空慈の距離は約5メートル。間合いはとても詰められない…

「へへ…鬼でも、知恵比べでは負けるようだな？俺がこつすることを用意できんとは…」

そういうと、萃香からもっと距離を取っていき、牢の外へと歩き出す…

「そうかい？先を読めてないのはあんただけさ…」

「え？」

牢の入り口には、すでににとりが竹筒を持って構えていた！

ヒュン！

にとりが竹筒を振ると、からくり蛇が空慈の首めがけて飛んでいく！

「ぐうつ…」

首に絡みついたからくり蛇に手をかけるも、その力は強く外せない。空慈が札に力を込めようとした瞬間！

バシツッ！

その隙に一気に近づいた萃香が札をたたき落とす！

「ああ…」

「…希望を失わせる殺し方が、最も残忍なものだ…。因果応報、絶望の死出の旅を味わいな…」

空慈の眼前で萃香がつぶやくと、にとりが最後のとどめを刺す！

グイイ！

にとりがひもを引き、蛇の先端が首に突き刺さる！

グサツツ！

「が…ふっ」

ドサツツ…

空慈が倒れたのを確認すると、鍵をあけて小傘のそばに駆け寄る！

「くそ…この巻物どうします？」

「しゃらくさい！」

萃香が巻物を持つと、力任せに強引に引きちぎった！

「…よし、行くよ」

にとりが小傘を背負うと、牢屋をあとにした…

一方その頃、屋敷の一角にて

涼庵はその時を今か今かと待っていた。これで死が遠のく…。希望にあふれたその眼には若々しい力がみなぎっていた…。

「失礼いたします…」

戸の向こう側から響く可憐な声。

ガラッ…

戸を開けると、幽々子が涼庵と目を合わせて一言告げる…

「準備が整いました…」

「おお、待っておったぞ！」

期待に胸をふくらませ、幽々子の横を通り抜けようとする…

その時！

ガッ！

いきなり幽々子に右手をつかまれ、涼庵が少したじろぐ。

バツ…

無言で幽々子が扇子を開き、涼庵は本能的に身の危険を察した！

「な、何を…」

そういい、幽々子の左手をつかみ、涼庵は恐怖に震えた！

何千、何万も行い、診てきた脈が、その手には一切感じない…

「死出の準備が整ったのよ…」

「止める！私はただ生きたかった…それだけなんだ！」

だが、幽々子の眼に宿った殺意は消えることはない…

ヒュン！

剃刀を仕込んだ扇子が、涼庵の首を搔つ切る！

「あ、ああ…」

ドサツッ…

パチン…

扇子をたたむと、音もなくその場から消えていった…

屋敷の庭にて

「さて…大詰めか」

月を眺めつつ妙伝がつぶやく。きちんと白の式服を着こなし、最後の仕事にかかるうとしていた…

ザッ！

場の静寂を打ち破る、砂利の音…

「誰だ？」

とっさに妙伝はそう返し、姿を見た瞬間その質問が愚問と感じた。確かに感じる大きな妖気、月光を浴びて輝く金髪…。人に有らざる者であることは一瞬で読み取れた…

「…八雲紫。訳あって、恨み晴らしに参りました…」
静かにそう言うと、傘を右手に構える…

「う、うつ…」

たじろぎながら、妙伝は札を投げる！だがそれは無意味であった！
紫は難なく札を素手ではじくと、徐々に間合いを詰めていく…

「うわああ！」

足がもつれて妙伝が倒れた！なおも間が詰まれていく…

「ちいっ！」

振り向きざまに隠し持っていた脇差を突く！

キーン！

紫は傘で脇差をはじくと、そのまま胸へと突きたてる！

「ぐうつ！！」

「あの世で化け物に退治されるがいいわ…この外道め…」

ザシュツッ！

深々と傘が突き刺さると、妙伝は息絶えた…

第八話・奇々怪々（後書き）

第八話、『奇々怪々』いかがでしたか？

元ネタはお察しの通り臓器売買。元の事件よりは残忍にしましたけどね。

江戸時代でどう扱うか悩んだ末に、江戸の風情にあう小傘を出演させこのような形になりました。

また、村紗はこの後、準レギュラーとして活躍するつもりです。

海に関する情報を集めたり、海で仕事人と共に仕事する…なんてなことがあるかもしれません。

でも海に縛り付けられてるから、出たり出なかったりする、そんな立ち位置と思ってください。

ではまたお目にかかったら、読んでいただけると幸いです。

それでは…

第九話・合縁奇縁（前書き）

のさばる悪は誰が討つ？

法の裁きは待てやしない、法を変えるは遅すぎる

とかくこの世のお上達や、しゃべりはたつが案が出ず

どうしたもんだと嘆いても、ろくな話は出てこない…

腹に抱えたその恨み、仕掛けて晴らしてみせようか？

私かい？私はただの酒飲みさ

伊吹萃香と人は呼ぶ…

第九話・合縁奇縁

ヒュ

ドオオオオン！！

星の輝く闇夜の空に、色とりどりの華が咲き乱れる。それを見上げる人、人、人。

手には酒や団扇、子供たちはりんご飴にかき氷を手に、その華の散開を見つめていた。

「たゞまやゝ！」

「綺麗ですねえ…。流石、隅田川花火大会…」

金魚柄の団扇で扇ぎつつ、髪を二つに縛ったにとりが話しかける。今日は少しおめかしをして、水色の布地に紅白の菊の花柄模様の浴衣を、赤い帯で締めている。

「来て良かっただろ？」

酒を片手に萃香が返す。萃香もまた、紅色の布地に黄色の鞠が描かれた浴衣を薄紫の帯で締めている。

すでに人ごみであふれかえる屋台の並びから、少し離れた土手にござを引いて酒を片手に大人数で酒盛りをしていた。

発起人は無論、萃香である。面子は文二や与一を含めた飲み仲間や、にとりの商売馴染み等である。

すでに辺りは顔を赤らめた酒飲みが騒いでいる。

ゴザの上は食い散らかした食い物の残骸に空の酒瓶が散乱している。

花火が上がることに沸き起こる拍手と歓声、指笛が響く…。

「…紫さんと幽々子さんは？」

りんご飴をくわえたまま、にとりが尋ねる。

「あゝ、あいつらだったら式の藍連れて花火大会行ってるよ…」

「へへ、私も藍さんには会ってみたかったなあ…。きっと美味しい料理作ってきてるんでしょうね…」

「止めときな…。そこには亡霊姫がいるんだよ？今頃…」

そう言うのと、あきれ顔でくいつと酒を飲みほした。

一方その頃、同じく隅田川花火大会の一角

「らゝん！お酒よろしく」

空になったとつくりを振りつつ紫が呼びつける。

大人っぽい黒の布地に、濃い紫色のアジサイが描かれた浴衣を白の帯で締めている。ゴザの上で藍によりかかっているのが何とも悩ましい。

「紫様！もうお止め下さい…。飲みすぎですよ？」

少し崩れた紫の着物を直しつつ藍が諭す。藍は藍色の布地に白で水仙が描かれた浴衣を黄色い帯で締めている。

先ほどから藍はせわしく動いている。酒や料理の配膳に追われていたのだった。

「らんちゃゝん！私にもお酒と焼き鳥、あと焼きイカも！」

焼き鳥の串をほおばりつつ幽々子が返す。水色の布地に紅や藍色で描かれた蝶が何とも優雅である。

その着物で酒に酔い、着物を着崩しているんだからたまったもので

はない。男衆が寄ってくるのには十分だった。

「あ、幽々子姐さん。何でしたら向こうにいい屋台がありましたよ。一緒に行いきやせんか？」

「てめえ何幽々子さんに色目使ってんだ馬鹿！鏡見てみる！」

「人のこと言えた顔じゃねえだろ！」

すでにゴザの周りは騒然としている。

ちゃんちき騒ぎ起こしている紫に料理を片っ端からたいらげる幽々子。そして寄ってくる男…。花火の轟音に負けず劣らずの騒ぎである。

「ハア…」

藍は大きく一つため息をつく、半ば投げやりのように酒を飲んでいた。

花火が終わり、宴もたけなわになった夜

「萃香さん、萃香さん！」

にとりに頬を数回ペシペシと叩かれ、頭の痛みと共に萃香が伸びをしつつ起き上がる。

「…あれ、皆は？」

辺りを見渡せばすでに人がまばらになっていた。花火も終わり、飲み仲間も帰ってにとりが介抱を引き受けたらしい…。

「もう帰っちゃいましたよ。さ、私達も帰りましょう」
にとりが差し出した手をつかむと、だるそうに起き上がり歩き出した。

「花火、きれいでしたね…」

丸めたゴザを肩に担いでにとりが歩く。七月の心地よい夜風が頬をなで、酒でほてった顔を優しく冷やしていく。

「ああ…」

萃香もうなずき、提灯片手に先頭を切る。辺りは薄暗いが、澄んだ空に浮かぶ月が淡く道を照らしている。

心地よい程度に涼しい風が吹き抜け、その長い髪がふわりとなびいていく…

「きゃあああ!!」

不意に聞こえた甲高い女の声。その叫び声は闇夜を切り裂き、二人の酔いが一気に冷める！

「にとり、行くよ!!」

「はい!」

川沿いの雑木林

澄んだ空に浮かぶ月の光も、その雑木林にはほとんど届かない。そのうつそうとした林の中を、一人の女がただひた走る。

黄色の着物にかんざしを刺しているが、髪や帯は少し乱れている。

「ハア…ハア…」

息を切らして走る女を数人の男が追う。手には小刀。いかつい男どもが追いかけ、徐々にその距離を詰めていく。

「ああっ！」

ドサッ！！

獣道に突き出ている木の根につまずき、女は前のめりに倒れる！

「恨みは無いが、死んでもらう…」

男の一人が小刀をちらつかせながらつぶやく。葉の隙間を縫って差し込む月光を受けて鈍く輝く刀が恐怖を増し、女はただ座り込んでいる…

「死ねっ！」

男が小刀を女の胸めがけて突いてきた瞬間！！

バキィッ！！

走ってきた萃香がほかに飛び蹴りを浴びせた！履いてきた木の草履が顔にめり込み、男はふわりと宙を舞い二転三転しながら飛んでいく！

「だ、誰だてめえ！？」

萃香は微笑を浮かべつつ腰のひょうたんを手に取り、くいつと一杯飲むと話し出す…

「あたしかい？あたしゃただの酒飲みさ」

「酒飲みの女が何の用だ！」

「そりゃこつちの台詞さ。大の男が女相手に刀持って大勢でかい？情けないねえ…」

「てめえ…」

怒りに満ちた男達が、刀を構えてにじり寄る！

「にとり！その人連れて逃げな！」

「はい！」

にとりは女性の手を取ると、林の出口に向かって走り出す！

「待ちやがれ！」

叫びつつ女を追って走る男の前に一瞬で間を詰めた萃香が立ちふさがる！一瞬萃香が見えた次の瞬間、腹に一撃拳が直撃する！

「ぐえっ！」

鈍い声と共に力なく男は倒れ、そのままうずくまる…

「野郎！！」

その間に距離を詰めたもう一人の男が、小刀で萃香の顔めがけ横なぎの一閃を振るう！

だが萃香はこれを的確に見切ると、刀をかわしつつ左の拳がえぐるように男の顔を正確に打つ！

「このアマ！」

三人目が萃香の脇腹めがけて突いてくる！

だが萃香はその右手をつかむと、突っ込んできた男の勢いに逆らわず、右手をつかむとそのまま背負い投げのように投げ飛ばした！

ドシャアッ！

「ぐえっ！」

「…ま、ざつとこんなもんかな」

パンパンと両手をはたくと、にとり達が走って行った林の出口に向かって走り出した…

「ハア…ハア…」

息を切らせながら、にとりが女の手を引いて走る！

「…つと、ここまで来れば十分かな？」

にとりが立ち止まると、後ろを振り返る。

薄暗い中、人影に目を凝らす…。人がいないのを確認すると、座り込む女のもとに駆け寄る。

「大丈夫ですか？どっか怪我は？」

そういうと袂たもとから白い綿の手ぬぐいを渡す。

「あ、いえ…大丈夫です。危ない所をどうも…」

女はそういい、頭を下げる。頭をあげて眼が合つと、結構な美人だ。

大きく、つぶらな瞳に白く整った肌。目の形は少し鋭いが、瞳が大きいのでそれが不思議な魅力に思える…。

「…あの、名は？」

「お敬と申します…あなたは一体？」

「私は河城にとり。からくり屋をやってます。…なにかあったんですか？」

「…祭りの最中に夫とはぐれて、歩いていたところを襲われました」

「なるほどねえ…」

その時！

ジャリッ…

小さく響く小石が弾ける音、それは暗い中に確かに響く…

「…にとりさん、どうしましょう…」

にとりに駆け寄ったお敬が小声で言う。

「…こっちだ」

お敬の手をつかむと、近くにあった井戸にもたれかかるように座り込み、袂から大きな白い羽衣のようなものを広げると、すっぽりと二人を包み込む。

「にとりさん、これは？」

「…とにかく、絶対に動かないで！」

念を押してにとりが告げ、二人は身を寄せたまま微動だにしない…

ザッ…

しばらくしてさっきの男衆の残りが駆け寄る。二人との距離はわずか一間ほど「約1・8メートル」である。

「にとりさん…」

「大丈夫…大丈夫だから何があっても動かず、叫ばないでいればいい…」

小声でにとりがそう促す。無言のまま静かにこくこくとうなずくと、二人は息を殺す…。

「…ちつくしよう、どこ行きやがった？」

にとり達との距離はすでに目と鼻の先、闇夜に目を凝らして険しくなった目じりまでもはつきりと見える。

だが男の視線は宙を舞い、二人とはろくに視線が合わない。お敬は何故そうなるかわけがわからなかったが、そのまま押し黙っていた。

「俺が知るかよ…。ここにはいそうにない。他を当ってみようぜ…」

捨てゼリフを残すと、男たちは去っていった…

「どうやら何とかなったようですね」

「ええ…。さ、行きましょう。送りますよ」

「…へーえ、その白い羽衣でねえ…」

屋敷からの帰り道、萃香が怪訝そうに白い羽衣を眺める。

「これはただの羽衣ではないのですよ」

にとりがふふん、と少し自慢げに胸を張る。

「これはこうしてかぶると…」

そっつい、頭からすっぽりと羽衣をかぶると、にとりの姿が背景と同化し消えていった！

「おお！？こいつは一体？」

「研究中の発明品の一つ、“光学迷彩”です！！」

「こりゃすごいな！」

「ええ…でも…」

そっつい、両手を軽く振ると…

「ありゃ！？」

にとりの両手だけが暗闇にはつきりと見える。暗いなか動く宙を舞う手は普通の人ならまず卒倒するような光景だろう…。

「…このとおり、動く見えちゃうんです」

「なるほどねえ。ま、隠れるにはいいんじゃないか？」

そっつい、羽衣を脱がせると夜の街に消えていった…

その翌日

萃香は変わらず、飲み屋にいた。冷酒を手に、時折ソバをすすする。席を交えるのは文二に与一である。彼らもまた、暑さをしのぐためにところてんをすすっていた。

ズズズズズズッ…

「…てなわけさ。女が大の男数人に襲われるようじゃあ、世も末だねえ」

ソバをすすりつつ、しかめっ面で萃香が語る。話題は無論、昨日のこと。文二に与一も苦虫をかみつぶしたような顔で聞く。

「…で、いったいどのどいつが襲われたんで？」

「あー、確かお敬とかいったなあ。水道橋あたりの」

「えー！？あのお敬さんか…。ただでさえついてねえってのに…」

「知ってんのかい？文二？」

「ええ…旦那が根なし草の浪人でね」

「…へえ、そりゃ災難だ。あんな美人だったのに」

「籍入れて夫婦になったってのに、あの男は何やってんだか…」

「しかもあの男、ちょいとした色男だね。引く手数多ってやつでさあ」

「何だい文二？ちょっと妬いてんのかい？」
ケラケラと笑いつつ萃香がからかう。

「ちょ、からかわんといってくださいよ！」

「ま、おめえがうらやむのも無理ねえわな。その顔だし」

「与ー！！」

飲み屋ではそれを皮切りに、笑い声が絶えなかった…

一方その頃
ガラッ…

「ただいま…」

障子紙がところどころ破れかけた戸板を力なく開けると、少し髭の伸びた男が中に入る…。

頭を剃らずに、髪を後ろで束ねた浪人である。浪人となってもう長いのだろう。

着物は古く、すこし茶色ににじんでいる。

「おかえり。全く何をそんなしよげかえってるの？」

お敬は座り込んだまま針仕事に精を出していた。

「…うるせえな。飯たのむ」

「…その様子じゃ、また…かい？」

「ああ…。ダメだった」

そついい、男はちゃぶ台の前に座り込み、刀を下ろす。

「ねえ、お前さん。もう刀なんて捨てちまったらどうだい？この太平の世に侍の職は少ない…。これを機に、いっそ…」

「やかましい！！」

バアン！

ちゃぶ台が割れんばかりの力で叩くと、男が叫ぶ！

「お敬！貴様俺を何だと思っている！武士の道を捨てろというか！？」

「でも…、このままじゃ私もあんたも…」

「…俺はとても出来ん。みなものたかひら源高平として、そして武士として俺は生きたい…」

「…わかったよ」

お敬は諦めて話を切り上げると、夕飯の準備に取り掛かり始めた。台所に消えていくお敬の背中を眺めつつ、高平は一つ舌打ちを打った…

（ちっ、昨日上手くいったらお敬は今頃あの世だったのに…）
ごろりと寝転がり、シミの付いた天井を見上げつつ高平は一昨日のことを思い出していた。

それは、一昨日のことだった…

高平はいつものように、城や大名、商店などといったところを転々としていた。

刀の腕にはそこそ自信があつたが、この太平の世で刀で食つていくのは難しい。浪人があふれ雇つてくれず、高平はいら立っていた。

ちっ…

舌打ち一つつと、川岸でただ黙々と小石を投げ入れていた。武士として生きたい。だがそうもいかない。

自分より腕のある者など数多くいるだろう。家に帰ればまたお敬が武士を捨てることを薦めてくるだろう。それが高平にはたまらなく嫌だった。

すでに浪人、下級武士であるがそれは出来ない。武士を捨てれば自分でなくなる。そんな気がした。

「あの…」

ふと後ろで聞こえたつやのある声。若い女子だろうか、こんな事は久しぶりだった。

お敬との仲は既に冷えつつある。こんな風に話しかけられるのが新鮮であつた。

振り返ると、そこには若い女子がいた。紅の着物に紅葉の模様。そして唇に塗られた紅が白い肌と相まって美しさを増していた。

髪には光り輝くかんざしが刺されている。良家の出だろうか、かんざしの中にはべっ甲で出来た物もあつた。

「源高平様でしょうか？」

「ああ…。して、お主は？」

「はい…私は小豆問屋、佐上屋の娘綾子と申します」

「佐上屋…ですって？」

その名に高平は驚いた。佐上屋といえば小豆問屋の大棚。以前高平はそこで用心棒に雇ってもらおうとしたが、あえなくそれは叶わなかったという苦い思い出がある。

「はい…」

「それで、拙者に何の御用で？」

「それは、私から説明させてもらいましょう」

突然、木陰から初老の男が顔を出した。その方こそ佐上屋の主人、奏次郎である。漆黒の羽織に身を包み、奏次郎が近づくと話し始めた。

「実は、私のたった一人の孫、綾子が貴方に惚れたそうで…」

「何ですって!？」

目を丸くし、高平は綾子を見る。対する綾子は恥ずかしげに頬を染めつつ、目をそらしていた。

「…しかし、貴方はすでに妻持ちの身。諦めよと申しましたが聞かず…。本気で貴方様に惚れこんだようで」

「…それは、まさか用心棒の時の？」

「ええ、一目ぼれだったそうです」

「しかし…私には妻が…」

「いえ、いい話と思いませんか？このまま綾子と共になれば、あなたは佐上屋の主人ですぞ？」

その言葉に高平の心は揺れた。このまま浪人やつてるより、この乗りかかった船に乗ってしまった方がいいのではないか？その疑問が頭をよぎる。

「…妻に、離縁状を書けと？」

「いえ、それでは貴方の評判が悪くなる。いずれは佐上屋の主人となる貴方に離縁した女がいては面倒。つまり…」

「もしや、殺せと？」

「そんな人聞きの悪い…。貴方はただ、お敬どのを呼び寄せればよいのです。あとは私の手の者が…」

さすがに高平は恐れた。殺しの片棒を担げと？

しかも的はよりによつて妻である。だが無事に済めば私は大柵の主人、武士を捨てても誇りは死なない。胸を張って表を歩ける。だが…

「まあ、これはその前金でございます…」

そついい、手に渡された物に高平は驚いた。束ねられた二十両もの

金。見たこともない大金だった。目のくらむような思いだった。金と、出世。さらには美人の妻を持つことになる。ついに高平の心は揺れ動いた。

「わかり…申した」

そして高平はお敬と共に花火大会へ向かい、わざとはぐれたのであった…

だが結果は失敗。どうしたものか…。夕飯を口にかき込みつつ、高平はお敬を見つめていた。

その翌日

高平はとある料亭にいた。出されるのは鯛のお造りや煮しめ、お吸い物といった豪勢なものだった。驚く高平を眺めつつ、奏次郎が話し始める。

「この間は申し訳ありません。まさかあんな手強い相手が現れるとは…」

「どういたします?」

「それなのだが…こういうのはどうでしょうか?」
手招きして高平を呼び寄せると、奏次郎が耳打ちする。

「…本当に、上手くいくでしょうかね?」

「後始末は任されい。大丈夫です」

その夜

お敬は一人、橋の上にいた。時折周りを見つつ、落ち着かない。身なりはきちんと整っていた。髪にはくしが通され、いつもは塗らない紅が指されている。

「お敬？」

「あ、お前さん…。何なんです？家に書き置きなんて…。しかも“めかしこんで水道橋に来てくれ”だなんて…」

「なに、人に見られちゃ何だしな。まあ、ついてきてくれよ」

「さ、ここだ」

連れてきたのはふぐ料理で名高い料亭、高島屋であった。無論、浪人風情が来られるような所ではない…

「お前さん…一体どうして？」

「これさ」

人目を気にしつつ、こっそりと高平はお敬に小判の束を見せた！

「これは…！？」

「博打で勝ったのさ。さ、行こう。俺のおごりだ」

「お前さん…」

お敬はただ泣いた。こんなこといつ以来だろうか。そう思うと、ただありがたくて泣けてくる。

「お、おいおい止めな。さあ、行こう」

「はい…」

高平の手に引かれ、お敬は高島屋ののれんをくぐった…。喜びに満ち溢れたその顔には、一点の曇りもなかった…

「さ、こちらふぐ刺しとなります」

仲居さんがふぐ刺しを運ぶ。どれも薄く斬られた見事なものである。白く輝く身が蒼い模様で描かれた豪華な絵皿にのっており、見るだけで食欲をそそられそうだった。

「すごいわね…」

話に聞いていたが、お敬はふぐ刺しを見るのが初めてだった。感慨深く皿の上の刺身を眺める。

「さ、頂こうぞ」

「はい！」

二人は箸を動かし始める。その味に二人の顔がほころんだ。こうして二人、笑って食べるのはいつ振りだろう。お敬は幸せに包まれていた…

「あ、その醤油をとってくれ」

「はい」

その一瞬だった。高平は手を伸ばし、刺身を取るふりをして右の拳を握り締めた。拳の中にはブドウ程の綿の球があり、握ると液が滴り、ふぐ刺しにほんの数滴かったが、お敬は気付かない。

「どうぞ」

「おお、すまぬ」

何事もなく小皿に醤油をたらす。そしてついに、お敬がその刺身を口に含み、食べた。

その数分後！

「うつ…」

カラアン！

突如、しびれがお敬の全身を駆け巡った！手にしていた箸を落とし、そのまま倒れる。麻痺がおこり、息苦しい。

何が何だかわからなかった。ふぐだろうか。とにかく医者を！お敬は必死に手を伸ばす！

「あ…あなた…」

その瞬間、お敬は全てを悟った。長年連れ添ったからこそわかる心。高平はただ淡々とお敬の顔を見ていた…

ドサッ…

力なくお敬が倒れると、ようやく高平が叫んだ！

「大変だ！フグに当たった！すぐに医者を！」

その後はトントン拍子に話が進んだ。

高平が盛ったのはフグ毒。フグに当たるのは珍しい話ではないと事は簡単に収まった。

それから3週間後、お盆も過ぎたころ高平には縁談が持ち上がった。いた。

「ここが私の持つ店か…」

高平は口を開けたまま、立派に作られた店構えを眺めていた。一気に舞い込んできた幸福、それに何一つ文句は無かった。

「旦那、結納はいよいよ明後日ですね！」

「佐平か、ついにそうなる。その時は頼んだぞ」

「へい…。ぬかりなく」

佐吉もまた、内心ほくそ笑んでいた。実際、高平はただの浪人。綾子は女だから実質の主人は番頭の佐吉となる。

その地位はもはや揺るぎないものとなっていた。辻切りの男衆を手

配し、毒入りの綿を用意したのも佐吉だからである。

どうあっても高平は佐吉を手のうちに収めておく必要があった。

「ですが、あまり派手には動かないように。いやな噂が出回っています」

「わかつているさ」

佐吉はあたりを見回し、二人しかいないことを確認すると高平に耳打ちした。

「何でも巷じゃあ、お敬さんの幽霊がでたとか」

「ばかばかしい。早く仕事に戻りな」

「へい…」

その夜

「ふんふふん」

鼻歌混じりに、女が一人歌いつつ橋を渡っていた。手にはお団子が並ぶ。

青の着物で歩くその女こそ、西行寺幽々子であった。お盆過ぎで残暑が残るが、夜風は涼しく、幽々子の髪を駆け抜けていく。

「……しい」

「え？」

不意に聞こえる女の声。か細い声が闇夜に響くが、小さくて何と言っているのかわからない。

辺りには誰もいないが、誰かの気配を感じた幽々子は身構えると、扇子を右手に取りだす。

「…恨めしい。ねたましい…」

声のする方にゆつくりと足を進める。そこには青白く、ぼうつとしたものがいた。さらに歩を進めると、徐々にそれが女とわかった…。女はただ静かに川底を見つめつつ、同じ言葉を繰り返す。それが既に生のない者だとは一目でわかった。

「…誰が妬ましいんだい？」

「！？」

幽霊は振り向くと、幽々子と対峙した。

「話してごらん。恨めしい、ねたましいじゃ何の事だかさっぱりだわ」

扇子で口元を隠しつつ、幽々子が促す。

「でも…」

「いいじゃないの。これでも同類よ？」

そついい、幽々子が橋の欄干らんかんに近づくと手を伸ばした！だがその白い手は難なく木でできた欄干をすり抜けた！

「実は…」

幽霊となつたお敬は驚くと、ぼつり、ぼつりと語りだした。同じ幽

霊どうしとあって口が緩んだのであろうか、全てをあらうざらい話した…

「…私は殺されたのです！死の間際に見たあの最後の顔、あれはまさしく鬼の顔！間違いござりませぬ！」

「で、恨みを晴らそうと？」

「ええ…」

「嘘ね」

「えっ！？」

その言葉にお敬はたじろいだ。意外な返しにただたじろぐ。

「…迷ってる、のかしら？」

お敬はただ黙っていた…。返す言葉が見つからない。
恨みがあるのは否めないが、高平に手を出すことにはためらいがあった…。どうしようもない思い、それが溢れていた。

「あたしが頼もうか？」

「え？」

「知ってるかしら？恨みを晴らす“仕事人”を」

数秒の長い沈黙の後、お敬は目を見開くと、ついに決断した！
懐から財布を取り出すと、幽々子に渡し頼み込んだ！

「これで…晴らせぬ恨みを！」

江戸のはずれの神社にて

「成程ね…すべて合点がいくわ」

紫が扇子片手に銭を見つめる。

「的は佐上屋主人、奏次郎。娘の綾子。番頭佐吉。そして…源高平。構わないかしら？」

幽々子が木箱の上に銭を並べつつ、全員に話しかける。

「無論だ」

「ええ…」

ジャラッ…

萃香とにとりが銭を取る。次いで紫が銭を取り…

ジャラ…

幽々子が銭を取ると…

フッ！

ろっそくを吹き消し、神社は闇に包まれた…

その夜

その夜は仮祝言と銘打って、佐上屋では宴会が行われていた。上機嫌に皆が酒を飲んでいる。

高平は幸せの最中にいた。これが昔考えられただろうか？今手には全てがある。そう思えてならなかった…

「佐吉…蔵にいい銘酒があったはずじゃ。持ってきてくれ」
不意に思いだした奏次郎が、佐吉に言い渡す。

「かしこまりました」

蔵へと佐吉が向かう。澄んだ空には星が輝き、辺りを淡く照らす。その中に一人の少女がいた。屋根の上から佐吉を眺めつつ、次第にその距離を詰めていく！

ゴキン…ゴキン…

闇夜に響く、骨のきしむ鈍い音色。伊吹萃香が佐吉を追う！

「え」と…

蔵の前にたどり着くと、佐吉は門の前で立ち止まり、鍵の束から蔵の鍵を探しだした。その瞬間！

ドサッ！

屋根から萃香が飛び降り、佐吉の肩に飛び乗る！と同時に左手で頭を、右手で顎をつかむと、一気に首をねじった！

ゴキン！！

「がつ……」

鈍い音が響き、首がねじれた佐吉が倒れた……

「佐吉の奴……どうしたのかの？」

「いいじゃありませんか、じい様。もう既に宴もたけなわの様ですし……」

「そうかの？」

「もう……」

そついい、綾子が頬を染める。奏次郎も察したらしい。

「そつじゃの……。あとは若い者に任すでしょうぞ」

少し苦笑いを含みつつ、奏次郎は足早に寢床へと向かい始めた……

「ふふ……」

頬笑みを浮かべつつ、奏次郎は廊下を歩いていた。こんなに笑う孫は初めてだ。

これで全て上手くいく……。そう考えつつ寢床へと向かう。その時だった！

ジイ…ゴロ…ジイ…ゴロ…

鈍く響くゼンマイの音色。それは暗い廊下にも響く。

「ん？」

奏次郎が近づくと、そこにはゼンマイ仕掛けで動く鬼の人形があった…

「これは…」

キュポン…

竹筒の蓋をあけ、にとりが身構える！

「一体誰が…不吉な」

ヒュン！

にとりが竹筒を振り、からくり蛇が奏次郎の首に絡みつく！

バシッ！

「ぐえっ！」

ギ、ギ、ギ、ギ…

なおも締めあげていき、首を締めあげる！そして…

グシュツッ！

「が…」

からくり蛇の先端が奏次郎の首に突き刺さった！！

ドサッ…

「…鬼はあんたさ」

ヒュン！

からくり蛇を一瞬でしまうと、その場から消えた…

「さ…高平様」

「うむ…」

高平は綾子と共に呑んでいた。ちびりちびりと飲んでいくが、それがたまらなく幸せだった。

綾子はただ私に寄り添う。これが最も良かった。お敬ならこうはいかない。

「…どうした？」

ふと、綾子が立ち上がる。

「ちよつと水を…」

赤い顔で綾子が席を外した。酒に慣れておらず、喉が渴いたのだろう。赤い顔した綾子は実に可愛らしかった。

「おう、行つてまいれ…」

ごくつ、ごくつ…

「ふーっ…」

台所の亀桶に溜めてある水に手を伸ばし、二、三杯一気に飲み干す。

つい酒が進んでしまった。顔がほてる。熱い熱い。着物を少しはだけ手で風を送る。

「扇子、お貸ししましょうか？」

幽々子が話しかけると、桜模様の扇子を広げて見せる。

「あら、ありがとう…」

何の疑いもなく綾子が近づき、扇子に手を伸ばした次の瞬間！

ヒュン！

一瞬で扇子に仕込んだ剃刀が綾子の喉を切り裂いた！

「あうっ！」

「…貸したげるわよ。あの世へ渡すのが条件だけだね」

パチン…

扇子を閉じると、台所から消えた…

「ん？遅いのう…」

一人酒を飲んでいたが、次第に不安になってきた。綾子に何か？酔いつぶれたのだろうか？居てもたってもおれず、高平は立ち上がると探し出す。

「綾子？綾子？」

「どうされたのです？」

正面にいる白い手ぬぐいを頭にかぶった女中が話しかける。

「綾子を知らぬか？」

「さあ…確か台所かと」

「そうか…」

高平は女中の脇を通り過ぎていくその瞬間！

女中に扮した紫が傘を持つと、背中合わせのまま傘を振り上げ高平の背に突き刺した！

グシュツツ！！

「あぐっ！」

次第にその背中が紅く染まっていく…

「貴様…卑怯だぞ…」

「武士崩れのあんたに言われたくないわね」

グシュツツ！

さらに深く傘を打ち込むと、高平はその場に倒れ伏した…

第九話・合縁奇縁（後書き）

東方必殺仕事人第9話、“合縁奇縁”いかがでしたか？

元ネタはかのホラーの傑作「四谷怪談」にございます。この話を仕事人風にリメイクすれば面白いのでは？と思いこうしました。

また、「橋姫」の話も少し取り入れました。ホラー作品を募集していたので、そこから四谷怪談と橋姫を思いついてこんな形となったのです。

この東方必殺仕事人もすでに9話、お気に入り数も12件、PVも1万件を超え、大変嬉しい限りです。

読んでくださる全ての方に、改めてお礼申しあげます。

話も進み、どんどん萃香が兄貴っぷりを発揮してますね…。

仕事人唯一の素手キャラのせいか、書いてる本人でも、たまに「あれ、これって萃香だよな？」って思う時があります。萃香ってこれでOKですかね？

夏休み中にできるだけ更新したいと思います。でもテスト結果しいでは厳しいかも…。気長にお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3715r/>

東方必殺仕事人

2011年8月8日22時58分発行